人文科学研究

—第 9 号—

目　次

◆　寄稿論文

神長官家における『諏訪大明神絵詞』受容のあり方　加藤夏希..... 1

A Semantic Approach to English Teaching　志儀智史.....23

F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* における女性像　森木順子.....51

◆　2011 年度修了者修士論文要旨 58

◆　院生会組織 66

◆　2011 年度院生会活動記録 67

◆　投稿規定 69

2011

信州大学人文科学研究科院生会

信州大学人文学部大学院委員会

神長官家における『諏訪大明神絵詞』受容のあり方

加藤　夏希

1はじめに

『諏訪大明神絵詞』(以下、『絵詞』とする)は、延文元年(一三五六)成立の諏訪社の縁起絵巻である。現在、絵部分は消失しており、詞書のみが伝わる。諏訪社の執行法眼であった小坂円忠によって編纂された。内容は、諏訪社の縁起を記した縁起部と、諏訪社の神事を記した祭祀部に分かれる。全十二巻で、縁起部巻一～巻五は、諏訪神の様々な霊験譚を載せる。祭祀部巻一～巻七は、諏訪社の正月から一年間の神事を説明するものである**(注1)**。

現在、『絵詞』の原本は失われているが、計十六点の伝本**(→表1「『絵詞』諸本一覧表」)**の存在が確認されている。十六点の内、十四点は現存し、神長本・武居祝本という二点の伝本が所在不明となっている。神長本・武居祝本は、金刺高野本(安政六年(一八五九)写)の注記から、ある程度の本文復元が可能である。

『絵詞』は、その伝本同士の本文の接近から、書写者が大幅に手を加えることの出来ない聖典として受容されてきた本であったと思われる**(注2)**。しかし、『絵詞』の諸本十六点の内、神長本一点のみ大きな改変が行われた伝本となる。『絵詞』諸本において、諏訪社神官の家**(注3)**に伝えられた伝本は、大祝本、神長本、権祝本、権祝矢島本、武居祝本の五点となる。これら五点の伝本の中でも、神官の職務と関わる改変が行われているのは神長本のみとなる。先行研究においても、神長本の存在は多く取り上げられてきたが、異同の全体像やその性格は明らかになってはいない**(注4)**。本稿では、神長本の異同要素全体を見ていく中で、神長本の性格を明らかにする。そこから、聖典としての受容ではなく、神官の職務と結び付いた『絵詞』受容のあり方を捉えたいと思う。

【金刺高野本について―神長本の復元方法】

まず、金刺高野本(以下、高野本とする)について説明する。高野本は、下社の大祝であった金刺信古の写本を、安政六年(一八五九)に、松代藩士であった高野武貞**(注5)**が書写したものとなる。金刺信古(一八一八～一八五九)は、下社の武居祝(今井氏)の家に生まれ、後に大祝を継いで金刺の姓を名乗った。また、国学者でもあり、平田篤胤の門に入って国学を学び、成沢寛経、松沢義章などの国学者達と交友関係にあった人物である**(注6)**。

高野本の奥書には、以下のように記されている。

右諏方大明神画詞一巻者、上宮権祝家秘本也。以上宮神長官家蔵本及家本校合畢。

一　神長本与他本異者、以朱傍書之。若仮字異同及文意先後等聊省之。

一　以墨校者、家本是也。元本誤写頗多、文意大抵与権

祝本大同小異耳。

一　全文依旧本臨書有点画異体而不可読者、以類本審之。

金剌信古■（花押）

傍線部が神長本に関する説明部分である。高野本は、権祝本（「上宮権祝家秘本」）を書写し、神長本（「神長官家蔵本」）と武居祝本（「家本」）を校合したものと説明されている。金剌信古は、権祝本の本文を写した際、神長本との比較を行い、神長本の異同部分を朱で傍書したことが分かる。送り仮名や記述の前後といった細かい差異に関しても言及しており、双方の伝本を詳細に比較していたことが伺える。この高野本に記されている神長本の注記を収集し、神長本の本文復元を行った。

（※金剌高野本と権祝本の書誌データを**（注7）**に示す。）

2 考察

【神長本の注記データ】

高野本に記されている神長本の注記を収集したところ、161例（縁起部68例／祭祀部93例）となった。神長本は、祭祀部の方に注記数が多く、大幅な注記が集中している。神長本の祭祀部の注記全93例を、権祝本と比較して内容ごとに分類を行ったところ、比較データ数は全101例となった。それらの神長本の注記データは、大きく分けて（A）、（B）、（C）の三つの要素に分類出来る。分類の結果を以下に示す。

［神長本 祭祀部の注記データ分類］

（A）神長官に関わる神事記事の追加　12例

（B）神長官に関わる神事説明の異同　54例

（B―1）神事説明の追加　27例

（B―2）神事説明の書き換え　20例

（B―3）神事説明の省略　7例

（C）その他（文字の異同や文末の差異など）　35例

（A）「神長官に関わる神事記事の追加」は、神長本にのみ、神長官に関わる神事が追加して記されているもの、（B）「神長官に関する神事説明の異同」は、神長官に関わる神事次第の説明が詳しくなっているもの、（C）「その他」は、文字や文末の異同、文の区切り方の差異など、細かい異同を記したものとなる。この（A）、（B）、（C）の三つの要素に従って、祭祀部の神長本注記データを分類したところ、比較データは全101例の内、（A）が12例、（B）が54例、（C）が35例となった。

さらに、（B）の例は、（B―1）「神事説明の追加」、（B―2）「神事説明の書き換え」、（B―3）「神事説明の省略」の三種類の注記が見られる。（B）全54例の内、（B―1）「神事説明の追加」は27例、（B―2）「神事説明の書き換え」は20例、（B―3）「神事説明の省略」は7例となる。（A）～（B―3）までのデータに通し番号を付けて**表2～5**に示した**（↓表2～5）**。

では、実際にそれらの異同内容を見ていき、神長本の性格

を考察していく。

【神長本と権祝本の比較】

［比較の凡例］

・『絵詞』諸本の題は、『諏訪大明神画詞』、『諏訪大明神絵詞』、『諏方絵詞』と数通りあるため、国文学研究資料館古典籍総合目録の表記に従い、『諏訪大明神絵詞』で統一した。

・権祝本の本文は、『諏訪』（神道大系）所収『諏訪大明神画詞』、神長本の本文は『信濃史料叢書 第三巻』所収『諏訪大明神絵詞』を用いた。権祝本、神長本ともに、マイクロフィルムの複写を確認して翻刻に訂正を加えた。

・本文の字体は適宜、通行の字体に改めた。

・引用本文中の［ ］は注を示し、スラッシュは改行を示す。

・権祝本と神長本の本文の異同箇所は太字で示し、実線を付ける。

・◆（章段）、神事名を示し、その下に**表2～5**の注記データ表に対応する注記番号を【注記番号　～】の形式で示す。

（A）「神長官に関わる神事記事の追加」例

まずは、（A）「神長官に関わる神事記事の追加」例から見ていく。神長本の方が記される神事が多くなっている例である。

◆四十四段　歩射神事（一月十七日）【注記番号　1、2、3】

［権］同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。

［神］**同三日神事例儀、四日打向キノ御狩、七日カユ祝達役神事、常ノコトシ**。同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。

一月の歩射神事についての章段である。権祝本・神長本共に「同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ」の記述は一致しているが、神長本には、その前に「同三日神事例儀、四日打向キノ御狩、七日カユ祝達役神事、常ノコトシ」という記述がある。この部分において、神長本は十七日以前の一月三日・四日・七日の神事説明を行っている。これらの神事は、権祝本には見られないものである。この一月三日・四日・七日の神事は、守矢史料館蔵『年内神事次第旧記』（以下、『旧記』とする）に共通する記事が見られる。以下に、神長本と『旧記』の比較該当箇所を挙げる。

※『年内神事次第旧記』…神長官を継ぐ守矢家に伝わる神事次第書の一つ。『旧記』には、上社の一年間の年中行事が記されており、嘉暦（一三二六）から文安五年（一四四八）に至る記事を収めている。成立年代は室町中期頃、現存する伝本は室町末期の写とされる。

［一月三日　御室神事］

［神］**同三日神事例儀**。

［旧］**三日みむろ御神事**。藤沢つるまき田役四立、御柏酒。祢宜、権殿、擬殿、副殿かゝみ一つゝ、雅楽十人三つゝ、やうとめけんこ三つゝ出。

［一月四日　御狩神事］

［神］**四日打向キノ御狩**。

［旧］**四日うちむき御狩**。是はふてけのれう。さかむろにて御酒御こく神殿役。

［一月七日　七草粥神事］

［神］**七日カユ祝達役神事**、常ノコトシ。

［旧］**七日みむろの御神事**。武井條七反、三立。御柏酒参、七々草粥まいる。祢宜、こん殿、きん殿、そい殿、もちかいあしおけ一つゝみむろへまゐらする。

このように、神長本に記されている一月三日・四日・七日の神事は、『旧記』の記事と共通する。（A）の全例を『旧記』の神事記事と比較したところ、全て一致することが分かった**（→表6）**。また、神長本と『旧記』に収められている全ての神事記事を対照したところ、『旧記』のみに見られる神事が10例、『旧記』・神長本に共通する神事が12例となった**（→表7）**。

『旧記』のみに収められる神事記事もあるものの、神長本の（A）例は、全て『旧記』と一致するものであり、『旧記』と神長本の神事記事の多くが共通していることが分かる。『旧記』は、神長官を継ぐ守矢家に伝わる神事次第書であり、神長官の立場から年中神事を記録したものである。神長本と『旧記』に収められる神事記事の共通性は、神長本の（A）例に見られる神事記事が、神長官に関わる年中神事であることを示す。神長官は、神事の実務に携わる立場にあり、諏訪社の年中神事と深い関わりがある。そのため、『絵詞』に記されている年中行事以外に、神長官自身の携わる神事を書き加えていったと思われる。

（B）「神長官に関わる神事説明の異同」例

では次に、（B）「神長官に関わる神事説明の異同」の内、（B―1）「神事説明の追加」、（B―2）「神事説明の書き換え」、（B―3）「神事説明の省略」例を見ていく。

（B―1）「神事説明の追加」

まず、（B―1）「神事説明の追加」例を見ていく。神長本の方が、詳しい神事説明が追加されている例となる。

◆四十三段　御占神事（一月一日）【注記番号　13】

［権］重半ノ占ニ付テ当年ノ神使六人ヲ差定ス。是レ氏人ノ巡役也。

［神］重半ノ占ニ付テ当年ノ神使六人ヲ差定ス。是レ氏人ノ巡役也。**去年、神使皆ウタツノ御左口神ヨリスメリテ、ヲリ井ト成サテ、此ノ御左口神ヲシタテ申。御対シタヽメテ、神長役ニテ所々エ差当ル。**

〈語釈〉

ウタツノ御左口神…御左口神を祀る祠。「ウタツ」とは、うだつ小屋のことであり、掘立て小屋のことを指す。御左口神は、御室の中に葦を以て組んだ祠に祀られていた。「うたつの御左口神」

という語は、『年内神事次第旧記』にも見られ、「刀時うたつの御左口神之御前にて御あかしをまいらせて」とある。

スメリテ…「すべる」に同じ。位を降りる、退位するの意。ここでは、前年の神使が御左口神の祭祀を終え、一年間の任期を果たして退位することを指す。

ヲリ井ト成テ…「おりゐ」は、位を降りること。前年の神使達が退位したことを指す。

御左口神ヲシタテ申…御左口神の依代である二十の神札を作ること。御作口神は土着の神霊として、神札の形象で祀られた。神使六人・神主十四人に対して、それぞれ二十の御作口神の神札が作られ、その年ごとに神長官がそれぞれの社の神主に配るのが慣例であった(『県宝守矢文書を読む』参考)。

正月一日の深夜に、神長官は、今年の神使六人を占いで決める御占神事が行われる。神使はその年の祭祀に奉仕する童子であり、土着の神霊である御左口神を祭る役目を持つ。氏人の中から一年の任期で選ばれる。

この部分において、神長本のみ「去年神使皆、ウタツノ御左口神ヨリスメリテ、ヲリ井ト成サテ、此ノ御左口神ヲシタテ申。御対シタヽメテ、神長役ニテ所々エ差当ル也。」とあり、神長本は、前年の神使が御左口神の祭祀を終えて、今年の神使と交代する様子を示すものとなっている。また、神使の交代に伴って、神長官が、新たな御左口神を祭る神札を所々の神主に配って回ることが説明されている。

神長官は、神事の実務に携わる立場にあると共に、御左口神祭祀を取り行う役職にあった。そのため、神長本は、神長官の御左口神祭祀に関する役目を示すと共に、同じく御左口神祭祀に携わる神使に関する説明を詳しく行っているものと思われる。

◆七十九段　御手倉送神事（十二月晦日）【注記番号　39】

[権]翌朝ニ遠州サナキノ池ニ浮ヒ出ツ。

[神]**帰リニハ刀ヲヌキロニクワエテ帰ル、彼雅楽人ノ帰ルニ余人行合ハ必死去ス**、翌朝ニ遠州サナキノ池ニ浮ヒ出ツ。

十二月晦日に行われる御手倉送神事についての章段である。御手倉送とは、今年一年の神事に使われた手向けの幣帛や榊の枝等を収めた荷を、雅楽の者が担いで葛井池まで運び、池に沈めるという神事である。翌朝には、その荷が遠江国のさなき池に浮び出るという言い伝えがある。

この部分において、神長本にのみ、「帰リニハ刀ヲヌキロニクワエテ帰ル、彼雅楽人ノ帰ルニ余人行合ハ必死去ス」という記述が見られる。神長本は、さなき池に関する言い伝えだけでなく、荷を沈めに行き、抜いた刀を口にくわえた雅楽に行き会った者は死ぬという言い伝えが示されている。この言い伝えは、守矢史料館蔵『嘉禎四年十二月一日年中神事次第』(以下、『嘉禎神事次第』とする)に類似した記事が確認出来る。以下に『嘉禎神事次第』の該当箇所を挙げる。

※『嘉禎神事次第』…守矢家に伝わる神事次第書の一。「嘉禎四年十二月一日」の奥書を持つが、成立は室町中期頃とされる。

夜丑刻一ヶ年ノ中ノ御幣ヲ神長、久須井池持向入云。**此時マイリアフ人ハ死人ノマネヲシテ、ウツフシニフスト[云々]。彼御幣、則遠江国サナキノ浦ニウカフト[云々]。**仍此所ニ大明神ヲ奉崇敬者也。

（『嘉禎四年十二月一日年中神事次第』）

『嘉禎神事次第』には、雅楽の者と遭遇した者は、死人の真似をしてうつ伏せになるという記述があり、神長本に記されている言い伝えと共通することが分かる。この部分においても、神長本は、神長官の家に伝わる神事次第書との繋がりを見せる。神長官の家における御手倉送神事の言い伝えは、「荷を沈めに行った雅楽の者と会うと死ぬ」、「翌朝に沈めた荷がさなき池に浮かび出る」の二つが認識されていたものと思われる。

本文中には、直接的に神長官の名は出てこないものの、神長官の視点から見た神事のあり方が示されている例となる。

このように、（B―1）「神事説明の追加」例は、神事における神長官や神使の役割を示し、神長官の視点から見た神事を記したものであることが分かる。その他の（B―1）「神事説明の追加」例の異同内容を**表8**に示す**（→表8）**。神長本の異同内容は、神長官（**【注記番号13、16、20、25、38】**）、神使（**【注記番号13、15～17、19、26、31、35】**）・神主（**【注記番号16、21、22】**）に関する記述だけでなく、御左口神祭祀の説明（**【注記番号14、36】**）や神事の場所（**【注記番号28、29、37】**）の説明、御頭役（神事に関わる氏人）（**【注記番号33】**）など、神事の実務に関する記述が確認出来る。（B―1）の記述は、神長官の視点から神事の内容を記し、その役目を示すものとなっていることが分かる。

（B―2）「神事説明の書き換え」

次に、（B―2）「神事説明の書き換え」例を見ていく。神長本において、神事説明の内容が書き換えられている例となる。

◆四十九段　神原並人屋神事（三月酉～子日）**【注記番号　48】**

[権]内県一反ノ後、千野ニ宿シテ**郡内南方境ニ至ル。三道巡礼共ニ山路ヲヘテ、往行三日五日ヲ送ル。**

[神]内県ハ千野御付有テ、神事例式。**次日古田、次日矢崎、次日栗林、合四夜。**

〈語釈〉

内県一反ノ後…内県（諏訪郡）の神使が、神殿の周りを一度廻った後に出立することを意味する。神使は、三月の酉日の神事を終えると、戌日から子日にかけて、今年の豊穣を祈願する御杖と御宝鈴を携え、村落を巡回し、廻湛と呼ばれる神事を行う。廻湛を行う場所は、神使によってそれぞれ異なり、内県の神使の場合は、酉日に千野に到着し、戌日に古田神主、亥日に矢崎神主、子日に

栗林神主の小社で神事を行い、丑日には船戸湛と峯湛を廻った後、帰着するという流れであった（『県宝守矢文書を読む』参考）。

（※神使は、一月一日に行われる御占神事において、外県（伊那郡）、内県（諏訪郡）、大県（佐久郡）それぞれに外県介、外県宮付、内県介、内県宮付、大県介、大県宮付の頭番役が定められ、この六頭から各一人の神使が選ばれ、一年間の任期を務めるものであった。）

三月には、初午日から次の午日まで十三日間連続して神事が行われる。その内、酉日から子日にかけては、神使が村落を巡って神事を行う廻湛が行われる。三月酉日の黄昏時に、神使達は神殿の御門屋から出門し、それぞれの目的地に向かっていく。

この例では、内県の神使の出立を説明する部分において、権祝本と神長本の記述が異なっている。権祝本の記述では、内県の神使が最初に千野に向かうことを説明した後、内県の神使は五日間（小県の神使は三日間）かけて郡内の南方を廻ると説明されている。一方、神長本の記述は、内県の神使が千野に向かって神事を行った後、その後に廻る地名を具体的に挙げていき、廻る日数も四日間としている。この例において、神長本は、神使の行き先を具体的に示し、神事にかかる日数を訂正するものとなっている。

◆五十段　大宮御祭（三月寅日）【注記番号　51】

［権］此又今日小県神使帰参。

［神］大県神使、柳湛ヨリ宮エランチヤウニテ来、例式ノ祭御手クラ有、後宮ヲ出テ前宮ニテ、トチノキ巡馬上途ニ三反。

〈語釈〉

小県…小県郡（現在の長野県上田市）を指すか。権祝本では、神使は小県・内県・外県の三地域から出されるとされるが、神長本では大県・内県・外県とされ、差異が見られる。

柳湛…湛木の一。神事が行われる木のことを湛木といい、柳の湛木に対して行われる神事のことを指す。『物忌令』「七木之事」に、「一　サクラタヽイノ木［粟沢ニ有］、一　真弓タヽイノ木、一　峯タヽイノ木、一　ヒクサタヽイノ木、一　トチノ木タヽイノ木、一　柳タヽイノ木、一　神殿松木タヽイノ木、［已上七木トハ是也］此木ノ本ニテハ皆々神事有」（『復刻諏訪史料叢書　第一巻』）と記されている。

三月の寅日神事の内容である。前述の例の続き部分にあたり、村落を廻っていた各々の神使達が神事を終え、帰参して来る様子を説明する部分である。

この部分において、権祝本では、神使六人の内、最後に戻って来るのは小県の神使と説明されているが、神長本においては大県の神使と記され、神使の名が異なっている。また、帰参の際に神使が行う所作が詳しくなっており、柳湛から宮に来て、乱声や奉納、栃の木廻りを行うことが説明されている。この例においても、神長本の記述は、神使の所作を具体

的に示すものとなっている。

このように、（B―2）「神事説明の書き換え」例は、神事内容の情報の追加や訂正が見られる。その他の（B―2）の異同内容を**表9**に示す**（→表9）**。（B―2）例の内、権祝本の情報に差異が見られる記述は14例となる。それらの例には、神使の所作説明が詳しくなっている記述（【注記番号48、49、51】）や、御左口神祭祀の説明（【注記番号58】）、御頭役に関する記述（【注記番号40、42】）、神事に関わる社僧数の訂正（【注記番号54】）や騎馬数の訂正（【注記番号55、56】）となっている。（B―2）の記述は、神事の情報の追加や訂正を行う例が見られ、神長官の視点から神事の内容を示すものとなっていることが分かる。

（B―3）「神事説明の省略」

次に、（B―3）「神事説明の省略」例を見ていく。神長本が記述を省略している例となる。

◆四十八段　大御立座神事（三月酉日）【注記番号63】

［権］其後、御手払［手ヲ／タ、ク］。**群集ノ緇素悉是ニ随フ。其声シハラクヤマス。内外ノ龍蹄驚動ス。**

［神］座敷シテ手放有テ、庭上先ノ神使二人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ、祢宜、御杖ヲ神主ニ渡ス。

三月酉日の神事に行われる大祝の御手払の所作に関する記述である。

権祝本では、大祝が御手払（手を叩く動作）を行った後に、周りの群集も同じ動作を行うため、境内に手を叩く音が鳴り響き、馬が驚き騒ぐ様子を記している。権祝本の記述は、大祝の所作を示すだけでなく、神事の場面描写を行って、臨場感を持って神事内容を示すものとなっている。

一方、神長本の記述は、大祝の所作説明のみとなっており、御手払の場面描写は見られず、大祝の御手払の説明後は、神使と神長官と祢宜の所作に関する記述となっている。神長本の記述は、神事場面の描写を省略し、神事の所作説明を加えていることが分かる。

同様に、神事の情景描写が省略されている例は他にも見られる。

◆四十九段　前宮神事（三月丑日）【注記番号66】

［権］前宮神事神使二手［外県／内県］御シツマリ、**落花風ニヒルカヘリ、山路雪ヲフム。職掌鞍馬金銀ノ荘厳、無双ノ見物也。**

［神］前宮神事有。内県外県納マレリ。

三月丑日に行われる前宮神事の次第であり、神使の廻湛の一部となる。神使は、戌日から子日にかけて行われる神原並人屋神事を終えた後、丑日には前宮において神事を行う。

この部分において、権祝本は、外県と内県の神使によって、前宮に御左口神が納められることを説明した後、神事の情景描写を記している。権祝本の記述は、花が風に舞い散る中、豪華な装いをした諏訪社の役人達や鞍馬の一行が、山中の雪を踏んで歩み行く情景の素晴らしさを語るものとなっている。一方、神長本の記述は、内県と外県の神使によって前宮神事が行われることを説明するのみであり、神事の情景描写は持たない。神長本は、あくまでも神長官に関わる神事内容を詳しく示すことに意識が置かれていたために、情景描写は省略されたものと思われる。

このように、（B―3）「神事説明の省略」例には、神事の情景描写の省略が見られる。その他の（B―3）例の異同内容を**表10**に示す**（→表10）**。神使の所作説明や神事説明を一部省略している例（**【注記番号60～62】**）、神事の情景描写を省略している例（**【注記番号63～66】**）が見られる。神長本は、神長官に関わる神事内容を記すことが重視されたものであり、情景描写といった神事次第に関わらない記述は省略したものと思われる。（B―3）の記述は、それぞれの伝本の意識の違いを端的に示す例となる。権祝本の意識は、諏訪社の神事全体を説明し、神事の場面を視覚的に描き出すことに置かれている。一方、神長本は、あくまでも神長官に関わる神事説明を記すことを重視していることが分かる。

3まとめ

以上、神長本の（A）「神長官に関わる神事記事の追加」と、（B）「神長官に関わる神事説明の異同」の内、（B―1）「神事説明の追加」、（B―2）「神事説明の書き換え」、（B―3）「神事説明の省略」の異同内容を見てきた。以下に、それらの内容をまとめる。

（A）「神長官に関わる神事記事の追加」例

・権祝本には見られない神事記事が記されている。

・『旧記』と神事記事が一致する（神長官の神事次第書との繋がり）。

→神長官が携わる年中神事を示すものとなっている。

（B）「神長官に関わる神事説明の異同」例

（B―1）神事説明の追加

・神事における神長官や神使の説明、実務に関する記述が詳しくなっている。

・『嘉禎神事次第』と共通する記述がある（神長官の神事次第書との繋がり）。

→神長官の立場から神事内容を記し、神長官の役割を示すものとなっている。

（B―2）神事説明の書き換え

・神使や御頭役に関する説明、神事が行われる場所などの情報が詳しくなっている。また、神事内容の訂正も見られる。

→神長官の立場から神事の情報の追加や訂正を加え、具体的な神事内容を記すものとなっている。

（B―3）神事説明の省略

・神事が行われている場面や情景の描写を省略している。

→あくまでも神長官に関わる神事説明を記すものとなっている。

（A）「神長官に関わる神事記事の追加」例では、神長本は、権祝本には見られない神事が記されており、それらの神事が全て『旧記』の記事と全て一致し、『旧記』に近い神事記事を収めていることが分かる。神長本は、神長官に関わる年中神事を示すものとなっている。

（B）「神長官に関わる神事説明の異同」例の内、（B―1）「神事説明の追加」では、神長本は、神長官や神使の詳しい所作説明が多く見られた。また、神事の言い伝えにおいて、『嘉禎神事次第』との繋がりも見られた。神長本は、神長官の立場から神事内容を記し、神長官の役割を示すものとなっていることが分かる。（B―2）「神事説明の書き換え」では、神長官の立場から情報の追加や訂正を行っている例が見られ、神長官に関わる神事内容を示すものとなっていることが分かる。（B―3）「神事説明の省略」では、権祝本に見られる神事説明の一部や情景描写を省略する例が見られ、あくまでも神長官に関わる神事次第を示すことに強い意識が置かれていたことが分かる。神長本は、神長官に関わる年中神事の内容を具体的に示すものとなっている。

権祝本は、神事の全体の流れを説明し、神事が行われている情景を描くことで、諏訪社の年中神事の様子を視覚的に描き出すものとなる。一方、神長本は、神事の実務に関わる神長官の立場に特化し、神事説明を詳しく記したものとなっている。神長本の意識は、あくまでも神長官に関わる神事内容を示すことに置かれていることが分かる。

では、（A）～（B―3）の異同全体を通して見えた神長本の性格をまとめたい。神長本には、神長官に関わる神事記事や説明の追加、記述の書き換えによる情報の追加や訂正が行われている。さらに、神事における情景描写を省略する例が見られ、あくまでも神長官に関わる神事次第を記すことに意識が置かれていることが分かる。それらの改変は、神長官の家に関わる年中神事と、それらの神事における神長官の役割を示すために行われたものと思われる。神長本は、神長官の家に伝わる『絵詞』として、神長官の関わる年中神事と、その内容を伝えていく役割を持っていたと思われる。

神長本には、忠実な書写を重んじる一般的な『絵詞』書写とは大きく異なる意識が見える。この伝本の存在によって、聖典としての『絵詞』受容から離れ、神官の職務と結び付いた『絵詞』受容という異なる受容形態があったことが分かる。神長官は、神事の実務や御左口神祭祀を執り行う役職であり、特殊な位置にあった神官と言える。神長本が、聖典としての『絵詞』受容から離れ、大幅な改変を行った背景には、神長官という役職を継ぐ家としての強い意識があったものと思われる。また、神長本の考察から、諏訪社に関わる国学者達の

繋がりが見えてくる。『絵詞』伝本を通して見える平田門下の国学者である金刺信古、成沢寛経らの関わりは、明治維新の際に起きた神仏分離の動きと深く関わると思われる。神長本の考察は、神長官という役職の特殊性を映し出すと共に、諏訪社の神仏分離に関わる国学者達の動きを知る可能性を見せるものとなる。

【注】

(1)『絵詞』全十二巻の本文全体を通して、内容ごとに初段～八十段までの章段に分類した。段の分類は、今井広亀『諏訪大明神画詞』（下諏訪町博物館　一九七九年）の章段分類を参考とした。初段～三十九段までが縁起部、四十段～八十段までが祭祀部となる。

(2)筆者は、『絵詞』諸本十六点の本文比較を行い、系統分類を行った。そこから、『絵詞』諸本は、伝本ごとの異同要素から、Ⅰ類とⅡ類の二系統に大きく分かれ、さらにⅠ類はA～D群の四系統に分かれることが明らかとなった。以下に、『絵詞』諸本を系統分類ごとに示す。**【Ⅰ類：巻の順序と祭祀部に錯簡あり。本文に記述の統一性、目移りによる差異などの特徴あり】**［**Ⅰ類A群**］権祝本（文明四年（一四七二））、春日早大本（宝永五年（一七〇八））、春日神宮文庫本（寛政九年（一七九七））、武居祝本（金刺高野本注記からの復元）（安政六年（一八五九）以前）、金刺高野本（安政六年（一八五九））、金刺丸山本（江戸時代後期）、金刺藤廬文庫本（江戸時代後期）。［**Ⅰ類B群（欠字箇所、縁起部の錯簡あり）**］大祝本（江戸時代前期）、続群書類従神宮文庫本（江戸時代後期（天保六年（一八三五）以前））、続群書類従宮内庁書陵部本（天保六年（一八三五））、八洲文藻宮内庁書陵部本（天保十四年（一八四三））、蕗原拾葉東大本（江戸時代後期）、松沢本（江戸時代後期）。［**Ⅰ類C群（異なる伝本系統が併せられた記述を持つ）**］権祝矢島本（江戸時代後期）。［**Ⅰ類D群（神長官の視点からの大幅な改変あり）**］神長本（金刺高野本注記からの復元）（安政六年（一八五九）以前）。**【Ⅱ類：錯簡なし、典拠との一致箇所や片仮名表記「ナド」の多用あり】**梵舜本（慶長六年（一六〇一））。『絵詞』諸本の分類は、金井典美「諏訪大明神絵詞の写本と系統」（『諏訪信仰史』名著出版　一九八二年）において詳細に行われている。ただし、金井の分類は、錯簡部分と奥書を中心とするものであるため、筆者は諸本の本文全体を比較して改めて分類を行った。金井の諸本分類と、筆者の諸本分類は、［Ⅰ類］と［Ⅱ類］、さらに［Ⅰ類A群］、［Ⅰ類B群］の諸本分類までは重なるが、［Ⅰ類C群］、［Ⅰ類D群］の分類は、筆者の独自の指摘となる。『絵詞』伝本間の本文は非常に接近しているため、それぞれの伝本の本文における細かい異同を比較して分類する形となるが、Ⅰ類D群に属する神長本一点のみ、大幅に本文が異なる伝本であり、『絵詞』諸本の中では特異な例として挙げられる。

(3)諏訪社の神官は、上社下社共に、最高位の神官大祝の下に五官と呼ばれる神官が従う形となる。上社は、大祝（神氏）に従う五官として、神長官（守矢氏）、祢宜大夫（小出氏）、権祝（矢島氏）、擬祝（小出氏）、副祝（守矢氏）の順となる。下社は、大祝（金刺氏）の後、五官は武居祝（今井氏）、祢宜大夫（志津野氏）、権祝（山田氏）、擬祝（山田氏）、副祝（山田氏）となる。これらの役職は、それぞれの家において世襲されていく制度であった。

(4)神長本に関する先行研究を以下に示す。①小島瓔礼「諏訪大明神絵詞」（『群書解題　第六巻』続群書類従完成会　一九六二年）では、『絵詞』の解題において、神長官の家に伝えられた伝本として、神長本の

紹介を行っている。小島は、『信濃史料叢書第三巻』における金刺校注本の翻刻を取り上げ、神長本は「権祝本系統の本をもとにして、神長官家本位に改めたもの」と説明している。②宮地直一『諏訪史二巻 諏訪神社の研究』(信濃教育会諏訪部会 一九五四年)は、諏訪社の正月一日から十二月晦日までの年中神事の内容を考察するため、『絵詞』権祝本・神長本・擬祝本、その他の『年内神事次第旧記』、『嘉禎四年十二月一日神事次第』などの神事次第書との比較を行っている。宮地は、神長本に対して、『年内神事次第旧記』の内容の近さを指摘し、『年内神事次第旧記』が神長官の家に伝わる内々の神事次第書として作られた伝本であるという神長本の特徴を指摘している。小島は、『絵詞』の伝本の一つとして神長本を紹介するに留まるが、宮地は、権祝本と神長本を比較し、その異同内容を明らかにした。ただし、宮地の研究は、諏訪社の神事内容を知ることが目的であるため、比較対象は神事内容に大幅な差異が見られる一部の箇所に留まる。

(5)高野武貞…(一八一八～一九〇七)。通称は車之助、号は莠叟。埴科郡松代に生まれる。父は松代藩士であり、自身も松代藩に仕えて物頭使役、取次役、郡中横目付、武具奉行を歴任し、維新の際は督学に挙げられた。幼少から読書を好み、長じて佐久間象山、山寺常山に師事して経義詩文を学び、国史や兵学にも通じた。著書に『松代藩史』、『松代地誌』、『川中島戦史』などがあり、嘉永五年(一八五二)以後の日記が残されている(日記の所在は現在調査中)。

(6)金刺(今井)信古…(一八一八～一八五九)。江戸時代後期の下社の大祝であり、国学者でもあった。武居祝家の出身であり、後に大祝の職を継いで金刺の姓を名乗る。父は下社武居祝の今井頼母、母は上社神長官守矢岩江の娘。父親の影響で幼時から国学と和歌を学び、十六歳の時に松沢義章の勧めで平田篤胤の門に入る。和歌を香川景樹に、国学を田中大秀に学んで、宮坂恒由、成沢寛経らの国学者と交友した。復古神道の思想を強く持ち、吉田神道からの諏訪社の独立を提唱した人物でもある。著書に『大塔物語』、『諏訪下社縁起』がある。

(7)扱う伝本の書誌データを示す。**[金刺高野本]**岩瀬文庫蔵。安政六年(一八五九)二月、高野武貞書写。一冊。縦二十七・四センチメートル×横一九・〇センチメートル。表紙は薄茶(原)。装丁は袋綴。料紙は楮紙。丁数は六十三丁。本文は、漢字片仮名交じり文。一面行数は十行、一行字数は二十三字前後。内題、外題、扉題「諏方大明神絵詞」。尾題なし。奥書は、金刺信古の本奥の後に、高野武貞による奥書と「成沢寛経所鈔録」の記述が記されている。「成沢寛経所鈔録」は、『康富記』と『建武式目』の『絵詞』に関する記事を抜き書きしたものである。『康冨記』の記事は、嘉吉二年十一月二十六日、同年十二月一日の記事が記され、伏見宮の要望により中原康冨が『諏訪大明神絵詞』の編者小坂円忠に閲覧を仲介したとある。その後に、『建武式目』の建武五年七月二十九日小坂円忠沙汰部分の条が記されている。高野武貞の奥書は、「安政六年歳次己未春二月、以上田成沢寛経所蔵本謄写于松代含章精廬 高野武貞■(花押)」とある。奥書に見られる成沢寛経(一七九七～一八六八)という人物は、金刺信古と同じく平田門人であり、金刺信古と交友関係にあった。詳しい経緯は不明であるが、金刺信古との関わりから金刺本『絵詞』を手に入れ、その所蔵本を高野武貞が目にする機会を得て、松代藩の学問所において書写したものと思われる。本文は権祝本を書写したものであり、一行字数・一面行数の一致、字体の類似、権祝本の一～三丁の虫食い破損箇所の点線での再現など、非常に忠実に書写されている。神長本(朱書き・傍書)、武

居祝本（墨書き・傍書）の注記を持つ点が大きな特徴である。**［権祝本］**守矢史料館蔵。文明四年（一四七二）、宗詢書写。一冊。縦二八・〇センチメートル×横一八・〇センチメートル。表紙は着色無し（後補）。装丁は袋綴。料紙は楮紙。丁数は六十一丁。本文は、漢字片仮名交じり文。一面行数は十行、一行字数は二十三字前後。外題、尾題なし。内題は「諏方大明神画詞」。末尾奥書には、「右尊神縁起上下両帙於金剛峯寺悉地院以同院之／盛円法印（右傍　先師諏方人）之本書写了予安居中也文明四年七月十一日／同十八日一反自見候大概交合了／金剛仏子宗詢［生／卅二］」とある。奥書によると、文明四年（一四七二）に、金剛峯寺悉地院の諏訪出身の僧盛円の写本を、信濃国伊那の文永寺の第六世住職の僧宗詢が、同院にて書写したものとされる。宗詢の書写した伝本が、上社権祝矢島家に伝えられ、権祝本と称されるようになった。宗詢は、知久氏の一族であり、知久氏と権祝矢島家は、古くから檀那関係にあったため、寄贈されたものと見られている（『諏訪市史上巻』参考）。権祝本は、弘化二年（一八四五）権祝家の矢島真賢木が、神長官守矢家に養子に入る際に持参して守矢家に伝わったことから、現在は守矢家蔵本となっている。裏表紙内側に「諏訪社／神長官／蔵書」との書き込みあり。また、一～三丁において、虫食い破損箇所を裏打ちした上から文字を書き込んでいる箇所あり。

【参考文献】

［辞書］

『角川古語大辞典』（角川書店　一九八四年）

『時代別国語大辞典　室町時代編』（三省堂　一九八五年）

『長野県歴史人物大事典』（郷土出版社　一九八九年）

『国史大辞典』（吉川弘文館　一九九七年）

『日本国語大辞典　第二版』（小学館　二〇〇一年）

［書籍］

信濃史料叢書編纂会編『信濃史料叢書　第三巻』（信濃史料叢書編纂　一九一三年）

大平喜間多『松代町史』（臨川書店　一九二九年）

宮地直一『諏訪史　第二巻』（信濃教育会諏訪部会　一九五四年）

渡邊世祐『諏訪史　第三巻』（諏訪教育会　一九五四年）

続群書類従完成会『群書解題　第六巻』（続群書類従完成会　一九六二年）

下諏訪町誌編纂委員会『下諏訪町誌　上巻』（甲陽書房　一九六三年）

〃　『　〃　下巻』（　〃　一九六九年）

伊藤富雄『『年内神事次第旧記』釈義』（永井出版企画　一九七九年）

今井広亀『諏訪大明神画詞』（下諏訪博物館　一九七九年）

金井典美『諏訪信仰史』（名著出版　一九八二年）

神道大系『諏訪』（神道大系編纂会　一九八二年）

諏訪教育会『復刻諏訪史料叢書　第一巻』（ほたる書房　一九八四年）

〃　『　〃　第四巻』（　〃　一九八四年）

宮坂光昭『諏訪大社の御柱と年中行事』（郷土出版社　一九九二年）

諏訪市史編纂委員会編『諏訪市史　上巻』（諏訪市役所　一九九五年）

長野県茅野市神長官守矢史料館『諏訪神社上社神長官守矢家文書目録』（長野県茅野市教育委員会　一九九五年）

細田貴助『県宝守矢文書を読む』（ほおずき書籍　二〇〇三年）

［マイクロフィルム複写資料］

西尾市岩瀬文庫蔵『諏訪大明神絵詞』（金刺高野本）
神長官守矢史料館蔵『諏訪大明神画詞』（権祝本）
〃　『年内神事次第旧記』
〃　『嘉禎四年十二月一日年中神事次第』

表１『絵詞』諸本一覧表

	系統	伝本名(通称)	年代	所在
1	Ⅰ類Ａ群	権祝本	文明4年(1472)	神長官守矢史料館
2		春日早大本	宝永5年(1708)	早稲田大学図書館
3		春日神宮文庫本	寛政9年(1797)	神宮文庫
4		武居祝本	安政6年(1859)以前	所在不明
5		金刺高野本	安政6年(1859)	西尾市岩瀬文庫
6		金刺丸山本	江戸時代後期	長野県立歴史館丸山文庫
7		金刺藤盧文庫本	江戸時代後期	上田市立図書館藤盧文庫
8	Ⅰ類Ｂ群	大祝本	江戸時代前期	諏訪市博物館
9		続群書類従神宮文庫本	江戸時代後期(天保6年(1835)以前)	神宮文庫
10		続群書類従宮内庁書陵部本	天保6年(1835)	宮内庁書陵部
11		八洲文藻宮内庁書陵部本	天保14年(1843)	宮内庁書陵部
12		蕗原拾葉東大本	江戸時代後期	東大史料編纂所
13		松沢本	江戸時代後期	國學院大學図書館
14	Ⅰ類Ｃ群	権祝矢島本	江戸時代後期	諏訪市博物館
15	Ⅰ類Ｄ群	神長本	安政6年(1859)以前	所在不明
16	Ⅱ類	梵舜本	慶長6年(1601)	東京国立博物館

表２（A）「神長官に関わる神事記事の追加」例

注記番号	章段	文章番号	權祝本	神長本	注記内容	注記方法	要素	神事日	神事名
1	四十四段	一	同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。	同三日神事例儀、四日打向キノ御狩、七日カユ祝達役神事、常ノコトシ。同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。	[神本如之武本ナシ]同三日神事例儀	補入	A	一月三日	御室神事
2	四十四段	一	同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。	同三日神事例儀、四日打向キノ御狩、七日カユ祝達役神事、常ノコトシ。同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。	四日打向キノ御狩、七日カユ祝達役神事、常ノコトシ	補入	A	一月四日	打向神事
3	四十四段	一	同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。	同三日神事例儀、四日打向キノ御狩、七日カユ祝達役神事、常ノコトシ。同十七日、神殿後ロシテ歩射ノ神事アリ。	七日カユ祝達役神事、常ノコトシ	補入	A	一月七日	七草粥神事
4	四十五段	一	二月十五日ハ、下宮同神宮寺ニシテ常楽会舞楽アリ。	二月十五日ハ、二月一日神事、大宮如常。同十五日、佐久山田神事例式タルヘシ、下宮同神宮寺ニシテ常楽会舞楽アリ。	[神本如是アリ武本ナシ]二月一日神事、大宮如常。	補入	A	二月一日	朔旦神事
5	四十五段	一	二月十五日ハ、下宮同神宮寺ニシテ常楽会舞楽アリ。	二月十五日ハ、二月一日神事、大宮如常。同十五日、佐久山田神事例式タルヘシ、下宮同神宮寺ニシテ常楽会舞楽アリ。	同十五日、佐久山田神事例式タルヘシ	補入	A	二月十五日	佐久山田神事
6	四十七段	一	三月一禊十三ヶ日神事相続ス。当年ノ神使六人立テ始ム。	三月一日神事例禄、同三日神事如常。三月一禊十三ヶ日神事相続ス。当年ノ神使六人立テ始ム。	[前ニ同]三月一日神事例禄	補入	A	三月一日	朔旦神事
7	四十七段	一	三月一禊十三ヶ日神事相続ス。当年ノ神使六人立テ始ム	三月一日神事例禄、同三日神事如常。三月一禊十三ヶ日神事相続ス。当年ノ神使六人立テ始ム	同三日神事如常	補入	A	三月三日	三日神事
8	五十五段	七	寺社ノ景趣尤幽奇也。	寺社ノ景趣尤幽奇也。同九日磯並前宮舞楽御頭同前、一日三ヶ所也。	[神長本]同九日磯並前宮舞楽御頭同前、一日三ヶ所也	補入	A	四月九日	磯並・前宮神事
9	七十八段	三・四	同廿四日、シンフクラヲ祭ル礼アリ。	廿三日ハ擬祝／神事小正体入畢、廿四日大阿祭カヤノ正体入畢、昔モ今モイヒキヲカキ帽／霊神厳重ナリ、神事祭如常、同廿五日早旦大祝神長サシアヒノシユ／モン有、サテ其夜大夜明シ神事後、御神体三スチ入帽、後廿番歌舞有／カウトノヽ又鷹ツカウ時、シンフクラヲ祭ル礼アリ。	廿三日ハ擬祝／神事小正体入畢	補入	A	十二月二十三日	擬祝神事
10	七十八段	三・四	同廿四日、シンフクラヲ祭ル礼アリ。先神長立テ諸奥国センくツカフシノヒトリ、姫御前腹ヲヤマセ給ニ、セイモン博士ニトワセ給ヘハ、	廿三日ハ擬祝／神事小正体入畢、廿四日大阿祭カヤノ正体入畢、昔モ今モイヒキヲカキ帽／霊神厳重ナリ、神事祭如常、同廿五日早旦大祝神長サシアヒノシユ／モン有、サテ其夜大夜明シ神事後、御神体三スチ入帽、後廿番歌舞有／カウトノヽ又鷹ツカウ時、シンフクラヲ祭ル礼アリ。	同廿五日早旦大祝神長サシアヒノシユ／モン有、サテ其夜大夜明シ神事後、御神体三スチ入帽、後廿番歌舞有／カウトノヽ又鷹ツカウ時	補入	A	十二月二十五日	大夜明神事
11	七十八段	一〇	同廿八日、瓶子調ヘ神官氏人乱舞興宴アリ	廿六日、家神事如常。廿七日、新申神事御室諸役如例、所々神役多シ。廿八日磯並／例禄畢、御室ニテ、同廿八日、瓶子調ヘ神官氏人乱舞興宴アリ	[神本]廿六日、家神事如常	補入	A	十二月二十六日	祢宜送神事
12	七十八段	一〇	同廿八日、瓶子調ヘ神官氏人乱舞興宴アリ	廿六日、家神事如常。廿七日、新申神事御室諸役如例、所々神役多シ。廿八日磯並／例禄畢、御室ニテ、瓶子調ヘ神官氏人乱舞興宴アリ	廿七日、新申神事御室諸役如例、所々神役多シ	補入	A	十二月二十七日	新申神事

表３（Ｂ―１）「神事説明の追加」

注記番号	章段	文章番号	權祝本	神長本	注記内容	注記方法	要素	神事日	神事名
13	四十三段	三	是レ氏人ノ巡役也	是レ氏人ノ巡役也。去年神使皆ウタツノ御左口神ヨリスメリテヲリ／井ト成サテ此ノ御左口神ヲシタテ申御対シタヽメテ神長役ニテ所々エ差当ル也。	[神本此文アリ武本ナシ]去年神使皆ウタツノ御左口神ヨリスメリテヲリ／井ト成サテ此ノ御左口神ヲシタテ申御対シタヽメテ神長役ニテ所々エ差当ル也	補入	B-1	一月一日	御占神事
14	四十六段	三	望テ御作神とゝ神ヲ立	望テ御作神とゝ神ヲ立。左口神付奉る印文有[柳ハ御手籠／ハ仰ハル]	左口神付奉る印文有[柳ハ御手籠／ハ仰ハル]	補入	B-1	二月晦日	荒玉社神事
15	四十六段	三	神使ノ食物飯酒魚鳥ノ上分ヲタムケテ	神使ノ食物飯酒魚鳥ノ猪鹿両集ムル是則随逐ノ道常御上分ヲタムケテ	猪鹿両集ムル是則随逐ノ道常御上分	右傍注記	B-1	二月晦日	荒玉社神事
16	四十八段	五～一二	其後、御手払[手ヲ／タヽ!ク]。群集ノ縮素悉是ニ随フ。其声シハラクヤマス。内外ノ龍蹄驚動ス。	座敷シテ、手放有テ、庭上先ノ神使二人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス。	大祝ノツトヲ申、座敷シテ手放過テ庭上先ノ神使二／人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス	右傍注記	B-1	三月酉日	大御立座神事
17	四十八段	五～一二	シツマリテ後、神使皆馬ニ乗テ打立。此時神長酒ヲ馬上ニ捧ク〔柏ノ葉ヲ閉テ／盃トス〕、神使各四度是ヲウク[片柏ト／号ス]。	サテ神使御馬ヲ引下、乗馬シテ北カシラニ別立、介ハ西宮付東両清酒御柏ヲ四ツヽニ酒ヲ手向テ、伝ニシテ御杖サシ奉。其後、介本ニテ四柏ニ酒手向、馬左へ是ヲオトス、次ニ宮付モ如此、其御幣／ヨヒ三声[雅楽役]。	其後、介本ニテ四柏ニ酒手向、馬左へ是ヲオトス、次ニ宮付モ如此、其御幣／ヨヒ三声[雅楽役]	右傍注記	B-1	三月酉日	大御立座神事
18	四十八段	五～一二	(比較箇所ナシ)	サテ神原ヨリ大祝先トシテ皆々庭上下テ御幣ヲ取、大祝奉、其ノ御幣給ハリ、神長介馬ノ頭ニ向テ申立畢。御手放シントウス。サテ、ランシヤウニテ介ヲ先立タチヲ巡事二度、サテ大祝神原上酒一献、大県介役也。サテ如先御杖カサリ立マイラセテ、神使ユウヲカケ先申立、神長如先、大祝、大ノツトヲ舞、御手放有、御枝御宝役如前、神使庭上儀式如此畢。	サテ神原ヨリ大祝先トシテ皆々庭上下テ御幣ヲ取、大祝奉、其ノ／御幣給ハリ、神長介馬ノ頭ニ向テ申立畢。御手放シントウス。サテ／ランシヤウニテ介ヲ先立タチヲ巡事二度、サテ大祝神原上酒一献、大県介役／也。サテ如先御杖カサリ立マイラセテ、神使ユウヲカケ先申立、神長如先、大祝／大ノツトヲ舞、御手放有、御枝御宝役如前、神使庭上儀式如此畢	右傍注記	B-1	三月酉日	大御立座神事
19	四十九段	一～三	(比較箇所ナシ)	大県上原神事例禄、次ノ日上桑原二ヶ所ニ昼湛神事畢。下桑原御宿リ神事アリ、次日下宮大和ニ昼湛神事有、同下宮馬場昼タタエアリ、サテトモノ町ニ御トマリ有、次ノ日ヲイ河ニ御留リアリテ、次日又下桑原田ニテマウケ有、又上原ニテマウケ有、サテマシ野エ付給フ。	大県上原神事例禄、次ノ日上桑原二ヶ所ニ昼湛神事畢。下桑原御宿リ／神事アリ、次日下宮大和ニ昼湛神事有、同下宮馬場昼タタエアリ、サテトモ／ノ町ニ御トマリ有、次ノ日ヲイ河ニ御留リアリテ、次日又下桑原田ニテマウケ有、又上／原ニテマウケ有、サテマシ野エ付給フ	右傍注記	B-1	三月酉日	大御立座神事
20	四十九段	一～三	其後前宮神事神使二手[外県／内県]御シツマリ	後神長御カマノ前儀成有、後前宮神事有、内県外県納マレリ。	後神長御カマノ前儀成有	補入	B-1	三月丑日	前宮神事
21	五十段	三・四	此時大祝ト祭使ト対座、盃酌ノ後共ニ退出。	此時大祝ト祭使ト対座、盃酌。小社祝十四人役也、春秋如此、後退出ス。又宮ト神主神事例禄後、	[神本]小社祝十四人役也春秋如此後退出ス又宮ト神主神事例禄後	補入	B-1	三月寅日	大宮新事
22	五十段	三・四	此時大祝ト祭使ト対座、盃酌ノ後共ニ退出。	此時大祝ト祭使ト対座、盃酌。小社祝十四人役也、春秋如此、後退出ス。又宮ト神主神事例禄後、	[神本]小社祝十四人役也春秋如此後退出ス又宮ト神主神事例禄後	補入	B-1	三月寅日	大宮新事
23	五十段	三・四	次ニ神原神事、明日ノ射手ヲサタム。	後神原神事例禄後、廿番舞有後、明日ノ射手ヲサタム。	後神原神事例禄、後廿番舞有後	右傍注記	B-1	三月寅日	大宮御祭
24	五十二段	一	辰日、先、祢宜送ノ儀アリ	辰日、先、神殿御釜ノ前ニテ柏御手クラ有後、祢宜送ノ儀アリ	[神本]神殿御釜ノ前ニテ柏御手クラ有後	補入	B-1	三月辰日	祢宜送神事

25	五十二段	二	神官等同座三献ノ後	ヒサクヲサカツキニシテ申立神長至ス、サテ、神官等同座三献ノ後	ヒサクヲサカツキニシテ申立神長至ス、サテ	右傍注記	B-1	三月辰日	祈宜送神事
26	五十二段	二	打立テ、野焼ニ趣ク	打立テ、内県ハマユミタヽエ火ヲアケ残ハ野焼ニ向。	内県ハマユミタヽエ火ヲアケ残ハ野焼ニ向	右傍注記	B-1	三月辰日	野焼神事
27	五十三段	二	帰路ニ高石山ニ於テ塩水ヲソヽキテ人ヲキヨム[雅楽／役]	帰路ニ高石山ニ於テ塩水ヲソヽキテ人ヲキヨム[雅楽／役]又ナカヘヤノ前ニ亡(?)アリ	又ナカヘヤノ前ニ亡(?)アリ	補入	B-1	三月巳日	新申神事
28	五十七段	三	盃酌已後、犬追物[人数／不同]	盃酌已後、大歳ニテ神事有、後馬場、犬追物[人数／不同]	[神本]大歳ニテ神事有、後馬場	補入	B-1	四月二十七日	矢崎祭
29	五十七段	二	五月会参詣ノ人数ヲアヒトヽノフル儀也。	五月会参詣ノ人数ヲアヒトヽノフル儀也。彼神原ニテ神事十郷役	彼神原ニテ神事十郷役	補入	B-1	四月二十七日	矢崎祭
30	五十七段	三	犬追物[人数／不同]衣ニ御斎所宮ニ詣ス。座席先ノコトシ。神事曩腊畢テ大草ヲトル。五月会参詣ノ人数ヲアヒトヽノフル儀也。	犬追物[人数／不同]御手御座居所ニテ御神事例禄後、御田過テ大草ヲ取ル、亡シタテ人形馬ハ十八ツヽナリ。弊牛五月会参詣ノ人数ヲアヒトヽノフル儀也。	[神本]御手御座居所ニテ御神事例禄後、御田過テ大草ヲ取ル亡シタテ人形馬ハ十八ツヽナリ弊牛	右傍注記	B-1	四月二十七日	矢崎祭
31	五十八段	三	次ニ五官[布衣／浄衣]六神使[赤／衣]以上下臈ヲサキトス	次ニ五官[布衣／浄衣]六神使[赤／衣]三十笠折エホシ／水干小籠箙矢トノ行騰タヽ犬追物出タチ也六人ノ以上下臈ヲサキトス	[神本]三十笠折エホシ／水干小籠箙矢トノ行騰タヽ犬追物出タチ也六人ノ	補入	B-1	五月二日	御狩神事
32	五十九段	二	先大祝ノ分、銀剣、弓、征箭、行騰	先大祝ノ分、銀剣、弓、征箭、行騰、沓	沓	補入	B-1	五月五日・六日	五月会頭
33	六十九段	四	又明年ノ頭役ヲ差定テ後	又明年ノ御頭ノ役人ヲ年記ヨツテ頭役ヲ差定テ後	[神本]御頭ノ役人ヲ年記ヨツテ	補入	B-1	七月晦日	御射山御狩神事
34	七十四段	一	下山ノ日[寅／申]国司ノ使、在庁ヲ率シテ本社ニ参行ス	下山ノ日[寅／申]下増申ノ日、国司ノ使、在庁ヲ率シテ本社ニ参行ス	下増申ノ日	補入	B-1	七月晦日	御射山御狩神事
35	七十七段	一	十一月廿八日ナン畢リ	十一月廿八日七々修(?)、神使御立増外県宮付頭神殿立テ、ナン畢リ	[神本]七々修(?)、神使御立増外県宮付頭神殿立テ	補入	B-1	十一月二十八日	神使御立御神事
36	七十八段	三・四	同廿四日、シンフクラヲ祭ル礼アリ。	廿四日大阿祭カヤノ正体入畢、昔モ今モイヒキヲカキ暢／霊神厳重ナリ、神事祭如常、同廿五日早旦大祝神長サシアヒノシユ／モン有、サテ其夜大夜明シ神事後、御神体三スチ入暢、後廿番歌舞有／カウトノヽ又鷹ツカウ時、シンフクラヲ祭ル礼アリ。先神長立テ陸奥国セン／＼ツカフシノヒトリ、姫御前腹ヲヤマセ給ニ、セイモン博士ニトワセ給ヘハ、	廿四日大阿祭カヤノ正体入畢、昔モ今モイヒキヲカキ暢／霊神厳重ナリ、神事祭如常、同廿五日早旦大祝神長サシアヒノシユ／モン有、サテ其夜大夜明シ神事後、御神体三スチ入暢、後廿番歌舞有／カウトノヽ又鷹ツカウ時	右傍注記	B-1	十二月二十四日～二十五日	大巳神事・大夜明神事
37	七十八段	一〇	同廿八日、瓶子調ヘ神官氏人乱舞興宴アリ	廿八日礒並例禄畢、御室ニテ、瓶子調ヘ神官氏人乱舞興宴アリ	廿八日礒並／例禄畢、御室ニテ	右傍注記	B-1	十二月二十八日	礒並神事
38	七十九段	一～四	晦日寅時、御手倉送、一年中ノ神事ニ手向幣帛、井ニ神柳ノ枝、柏ノ葉等ヲ御宝殿ニヲサメテ、是ヲ取シツメテ机飯一膳ヲソエテ、雅楽一人荷擔シテ郡内葛井ノ池ニ入ル	晦日寅時、御室ニテ神長、天長地久御幣ヲ申畢、サテ久須井ヘ大火ヲ見スレハ、火ヲ合テ御手幣御ヘイヲ取集メテ、柳ノ瓶子ニ酒ヲ入テ、ホカ飯一ソヘテ、雅楽一人荷担シテ、郡内葛井ノ池ニ入奉リ	御室ニテ神長、天長地久御幣ヲ申畢、サテ久須井ヘ大火ヲ見スレハ、火ヲ合テ御手幣御ヘイヲ取集メテ、柳ノ瓶子ニ酒ヲ入テ、ホカ飯一ソヘテ、雅／楽一人荷担シテ、郡内葛井ノ池ニ入奉リ	右傍注記	B-1	十二月晦日	御手倉送神事
39	七十九段	一～四	翌朝ニ遠州サナキノ池ニ浮ヒ出ツ。	帰リニハ刀ヲヌキロニクワエテ帰ル、被／雅楽人ノ帰ルニ余人行合ハ必死去ス。翌朝ニ遠州サナキノ池ニ浮ヒ出ツ。	帰リニハ刀ヲヌキロニクワエテ帰ル、被／雅楽人ノ帰ルニ余人行合ハ必死去ス	右傍注記	B-1	十二月晦日	御手倉送神事

表４　（Ｂ―２）「神事説明の書き換え」

注記番号	章段	文章番号	權祝本	神長本	注記内容	注記方法	要素	神事日	神事名
40	四十七段	一	先初午ノ日、下臈二人[外県大明／神ヲトラス]立テ	先初午ノ日、外県御頭ハ介役御敷同前、立テ	外県御頭ハ介役御敷同前	右傍注記	B-2	三月初午日	外県御立座神事
41	四十七段	二	未日所末戸社[十二所／第一]神事仮屋ヲカマヘテ	未日所政社[十三／所第一]神事仮屋ヲカマヘテ	所政社[十三／所第]	右傍注記	B-2	三月未日	所末戸社神事
42	四十八段	一	神事、饗膳アリ	御頭内県介、饗膳アリ	御頭内県介	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
43	四十八段	五～一二	御杖ヲ神役ニワタス。神使コトサラ手ヲカク。従人是ヲ助テ本座ニ帰リ、下介前ニ同シ。小県二人進退又如此。	御杖ヲカサリ奉テ申立。神長役神使[カソノ皮ヲ]本座ニ帰ル。宮付先日大県役如此。	杖ヲカサリ奉テ申立。神長役神使(補入カソノ皮ヲ)／本座ニ帰ル。宮付先日大県役如此。	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
44	四十八段	五～一二	シツマリテ後、神使皆馬ニ乗テ打立。此時神長酒ヲ馬上ニ捧ク[柏ノ葉ヲ閉テ／盃トス]、神使各四度是ヲウグ[片柏ト／号ス]。	サテ神使御馬ヲ引下、乗馬シテ北カシラニ別立、介ハ西宮付東両清酒御柏ヲ四ツヽニ酒ヲ手向テ、伝ニシテ御杖サシ奉。	サテ神使御馬ヲ引下乗馬／シテ北カシラニ別立介ハ西宮付東両清酒御柏ヲ四ツヽニ酒ヲ手向テ伝ニシテ御杖サシ／奉	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
45	四十八段	五～一二	其後出門[御門屋ト／号ス]、漸黄昏ニ及テ、内県小県二手、各松明ヲトリテ、楽ヲ奏シテ、神殿郭外ヲ逆廻ル。御杖[賀主役／騎馬]、御宝[或ハ御杖ニ付／或ハ別ニモツ]前後、親昵有縁ノ一族氏人等歩行ニテ扈従ス。後騎禄人宮仕鳥居ノ下マフケマツ。	出門[右御門戸ト／是ヲ号]。御杖御宝ヲ神主懸杖先陣逆ニ巡前行、親昵有縁ノ一族氏人等歩行ニテ扈従ス。後騎禄人宮仕鳥居ノ下マフケマツ。	出／門[右御門戸ト／是ヲ号]	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
46	四十八段	五～一二	其後出門[御門屋ト／号ス]、漸黄昏ニ及テ、内県小県二手、各松明ヲトリテ、楽ヲ奏シテ、神殿郭外ヲ逆廻ル。御杖[賀主役／騎馬]、御宝[或ハ御杖ニ付／或ハ別ニモツ]前後、親昵有縁ノ一族氏人等歩行ニテ扈従ス。後騎禄人宮仕鳥居ノ下マフケマツ。	出門[右御門戸ト／是ヲ号]。御杖御宝ヲ神主懸杖先陣逆ニ巡前行、親昵有縁ノ一族氏人等歩行ニテ扈従ス。後騎禄人宮仕鳥居ノ下マフケマツ。	御杖御宝ヲ神主懸杖先陣逆ニ巡前行	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
47	四十九段	一～三	内県一反ノ後、千野ニ宿シテ郡内南方境ニ至ル。三道巡礼共ニ山路ヲヘテ往行、三日五日ヲ送ル。	内県ハ千野御付有テ、神事例式。次日古田、次日矢崎、次日栗林、合四夜。	[神本]内県ハ千野御付有テ、神事例式	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
48	四十九段	一～三	内県一反ノ後、千野ニ宿シテ郡内南方境ニ至ル。三道巡礼共ニ山路ヲヘテ往行、三日五日ヲ送ル。	内県ハ千野御付有テ、神事例式。次日古田、次日矢崎、次日栗林、合四夜。	次日古田次日矢崎次日栗林合四夜	右傍注記	B-2	三月酉日	大御立座神事
49	四十九段	一～三	戊亥子三ヶ日ノ神原并人屋ノ神事、又是ヲ略ス。	戊日、大県介頭也、亥日内県古宮神事有、同平井弓神事、小河内御トマリ有、次ニ常土之ノ輪朝神事、次真木、次伊那ヘ御園マエフチサセコヨリ御立アリテ前宮エ付給フ。	戊日、大県介頭也、亥日内県古宮神事／有、同平井弓神事、小河内御トマリ有、次ニ常土之ノ輪朝神事、次真木、次伊那ヘ／御園マエフチサセコヨリ御立アリテ前宮エ付給フ	右傍注記	B-2	三月戌～子日	神原並人屋神事
50	四十九段	一～三	丑日、先峯多々口。其後前宮神事神使二手[外県／内県]御シツマリ、落花風ニヒルカヘリ、山路雪ヲフム、職掌鞍馬金銀ノ荘厳、無双ノ見物也。	内県峰落エ御付有、神事後、前宮神事有、内県外県納マレリ。	内県峰落エ御付有、神事／後神長御カマノ前儀成有、後前宮神事有、内県外県納マレリ	右傍注記	B-2	三月丑日	前宮神事
51	五十段	三・四	又今日小県神使帰参。	大県神使、柳落ヨリ宮エランチヤウニテ来、例式ノ祭御手クラ有、後宮ヲ出テ前宮ニテ、トチノ／キ巡馬上途ニ三反、	大県神使、柳落／ヨリ宮エランチヤウニテ来、例式ノ祭御手クラ有、後宮ヲ出テ前宮ニテ、トチノ／キ巡馬上途ニ三反	右傍注記	B-2	三月寅日	大宮御祭
52	五十三段	一	先大宮ニ詣テヽ、饗膳アリ	先大宮ニ詣テヽ、御手クラ所々宝殿内畢。	御手クラ所々宝殿内畢	右傍注記	B-2	三月巳日	新申神事
53	五十八段	一	前行旗二流[左穀葉／右白]雅楽黄衣ニ行騰ヲハキテ是ヲサス	前行旗二流[左白／右穀葉]雅楽黄衣ニ行騰ヲハキテ是ヲサス	[左白／右穀葉]	右傍注記	B-2	五月二日	御狩押立神事
54	五十九段	四	社僧二十五人ニハ	社僧十九人ニハ	十九人	右傍注記	B-2	五月五・六日	五月会頭
55	六十七段	三	古ヘハ百騎計	古ヘハ数百騎計	数	補入	B-2	七月二十七日	御射山御狩神事

56	六十七段	三	近来ハ僅ニ二三十騎ナトニ減少ス	近来ハ僅ニ二百三十騎ナトニ減少ス	百	補入	B-2	七月二十七日	御射山御狩神事
57	七十二段	一	下旬[巳亥／日]秋尾ノ祭御狩アリ	下旬[日／巳]秋庵ノ祭狩有	下旬[日／巳]秋庵ノ祭狩有	右傍注記	B-2	九月下旬	秋尾祭
58	七十八段	三・四	今日第一ノ御体ヲ入奉ル。大祝以下神官参籠ス。	今日御左口神二ヶ所ニ御入有、神事畢大祝以下神官参籠ス。	[神本]今日御左口神二ヶ所ニ御入有、神事畢大祝以下神官参籠ス	右傍注記	B-2	十二月二十二日	所末戸社神事
59	七十九段	一～四	晦日寅時、御手倉送、一年中ノ神事ニ手向幣帛、并ニ榊柳ノ枝、柏ノ葉等ヲ御宝殿ニヲサメテ、是ヲ取シツメテ机飯一膳ヲソエテ、雅楽一人荷擔シテ郡内葛井ノ池ニ入ル	晦日寅時、御室ニテ神長、天長地久御幣ヲ申畢、サテ久須井ヘ大火ヲ見スレハ、火ヲ合テ御手幣御ヘイヲ取集メテ、柳ノ瓶子ニ酒ヲ入テ、ホカ飯一ソヘテ、雅楽一人荷担シテ、郡内葛井ノ池ニ入奉リ	御室ニテ神長、天長地久御幣ヲ申畢、サテ久須井ヘ大火ヲ見スレ／ハ、火ヲ合テ御手幣御ヘイヲ取集メテ、柳ノ瓶子ニ酒ヲ入テ、ホカ飯一ソヘテ、雅／楽一人荷担シテ、郡内葛井ノ池ニ入奉リ	右傍注記	B-2	十二月晦日	御手倉送神事

表５　（Ｂ―３）「神事説明の省略」

注記番号	章段	文章番号	権祝本	神長本	注記内容	注記方法	要素	神事日	神事名
60	四十八段	五～一二	神ノ長御杖ヲ神役ニワタス。神使コトサラ手ヲカク。従人是ヲ助テ本座ニ帰リ、下介前ニ同シ。小県二人進退又如此。	神ノ長御杖ヲカサリ奉テ、申立神長役。神使[カソノ皮ヲ]本座ニ帰ル。宮付先日大県役如此。	大祝ノツトヲ申、座敷シテ手放過テ庭上先ノ神使二／人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス	右傍注記	B-3	三月酉日	大御立座神事
61	四十八段	五～一二	此間ニ神使ノ鞍馬ヲヒキツ。盃酌出ヌレハ四人共ニ庭上ニ立ツ。巫女等介錯、大祝同シク出テ相フ、彼是床子ニ付ク、大祝言ヲヨミアク[口伝／アリ]。神使ロマネヲス。	大祝ノツトヲ申。	大祝ノツトヲ申、座敷シテ手放過テ庭上先ノ神使二／人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス	右傍注記	B-3	三月酉日	大御立座神事
62	四十八段	五～一二	此間ニ神使ノ鞍馬ヲヒキツ。盃酌出ヌレハ四人共ニ庭上ニ立ツ。巫女等介錯、大祝同シク出テ相フ、彼是床子ニ付ク、大祝言ヲヨミアク[口伝／アリ]。神使ロマネヲス。	大祝ノツトヲ申。	大祝ノツトヲ申、座敷シテ手放過テ庭上先ノ神使二／人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス	右傍注記	B-3	三月酉日	大御立座神事
63	四十八段	五～一二	其後、御手払[手ヲ／タヽク]。群集ノ緇素悉是ニ随フ。其声シハラクヤマス。内外ノ龍蹄震動ス。	座敷シテ、手放有テ、庭上先ノ神使二人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス。	大祝ノツトヲ申、座敷シテ手放過テ庭上先ノ神使二／人出、神長御宝ヲ神主ニ渡シ祢宜御杖ヲ神主ニ渡ス	右傍注記	B-3	三月酉日	大御立座神事
64	四十八段	五～一二	其後出門[御門屋ト／号ス]、漸黄昏ニ及テ、内県小県二手、各松明ヲトリテ、楽ヲ奏シテ、神殿郭外ヲ逆廻ル。御杖[賀主役／騎馬]、御宝[或ハ御杖ニ付／或ハ別ニモツ]前後、親昵有縁ノ一族氏人等歩行ニテ扈従ス。後騎禄人宮仕鳥居ノ下マフケマツ。	出門[右御門戸ト／是ヲ号]。御杖御宝ヲ神主懸杖先陣逆ニ巡前行、親昵有縁ノ一族氏人等歩行ニテ扈従ス。後騎禄人宮仕鳥居ノ下マフケマツ。	出／門[右御門戸ト／是ヲ号]御杖御宝ヲ神主懸杖先陣逆ニ巡前行	右傍注記	B-3	三月酉日	大御立座神事
65	四十九段	一～三	三道巡礼共ニ山路ヲヘテ往行、三日五日ヲ送ル。廻神ト称シテ村氏是ヲ拝ス。	次日古田、次日矢崎、次日栗林、合四夜、大県上原神事例禄、次ノ日上桑原二ヶ所ニ昼滝神事畢。下桑原御宿リ神事アリ、次日下宮大和ニ昼滝神事有、同下宮馬場昼タタエアリ、サテトモノ町ニ御トマリ有、次ノ日ヲイ河ニ御留リアリテ、次日又下桑原田ニテマウケ有、又上原ニテマウケ有、サテマシ野エ付給フ。	次日古田次日矢崎次日栗林合四夜／大県上原神事例禄次ノ日上桑原二ヶ所ニ昼滝神事畢。下桑原御宿リ／神事アリ次日下宮大和ニ昼滝神事有同下宮馬場昼タタエアリサテトモ／ノ町ニ御トマリ有次ノ日ヲイ河ニ御留リアリテ次日又下桑原田ニテマウケ有又上／原ニテマウケ有サテマシ野エ付給フ	右傍注記	B-3	三月酉日	大御立座神事
66	四十九段	一～三	丑日、先峯多々口。其後前宮神事神使二手[外県／内県]御シツマリ、落花風ニヒルカヘリ、山路雪ヲフム、騎牽鞍馬金銀ノ荘厳、無双ノ見物也。	内県峰落エ御付有。神事後、前宮神事有、内県外県納マレリ。	内県峰落エ御付有、神事／後神長御カマノ前儀成有、後前宮神事有、内県外県納マレリ	右傍注記	B-3	三月丑日	前宮神事

表7　神事記事対照表

	月	日	神事内容	要素	注記番号
1	一月	一日	年入神事	旧	
2			鮭狩り神事		
3			御占神事		
4		三日	御室神事	旧・神	1
5		四日	打向御狩	旧・神	2
6		七日	七草粥神事	旧・神	3
7		十五日	筒粥神事	旧	
8		十七日	歩射神事		
9	二月	一日	朔旦神事	旧・神	4
10		十五日	佐久山田神事	旧・神	5
11		十五日	常楽会舞楽		
12		晦日	荒玉社神事		
13	三月	一日	朔旦神事	旧・神	6
14		三日	三日神事	旧・神	7
15		初午日	外県御立座神事		
16		未日	所末戸社神事		
17		申日	人屋神事		
18		酉日	大御立座神事		
19		戌日	神原並人屋神事		
20		亥日	神原並人屋神事		
21		子日	神原並人屋神事		
22		丑日	前宮神事		
23		寅日	大宮御祭		
24		卯日	祝日射礼		
25		辰日	祢宜送・野焼き神事		
26		巳日	新申神事		
27		午日	磯並神事		
28	四月	一日	朔旦神事		
29		三日	三日神事		
30		七日	大宮花会		
31		八日	神宮寺花会		
32		九日	磯並神事・前宮神事	旧・神	8
33		十五日	大宮臨時神事		
34		二十六日	相本神事	旧	
35		二十七日	矢崎祭		
36	五月	一日	朔旦神事		
37		二～四日	御狩神事		
38		五・六日	五月会頭		
39		十五日	望日神事	旧	
40	六月	一日	朔旦神事		
41		十五日	望日神事		
42		二十日	大宮臨時神事		
43		二十七～九日	御作田狩押立神事		
44		晦日	神原神事	旧	
45		晦日	藤島社田植神事		
46		晦日	大宮神事		
47	七月	一日	朔旦神事		
48		七日	七夕神事		
49		二十六～三十日	御射山御狩神事		
50	八月	一日	墨神事		
51		十五日	放生会		
52	九月	朔旦	朔旦神事		
53		九日	重陽神事		
54		下旬	秋尾祭		
55		下旬	大宮御祭		
56	十月	一日	朔旦神事		
57		十五日	望日神事		
58	十一月	一日	朔旦神事	旧	
59		十五日	望日神事	旧	
60		二十五日	藤島神事	旧	
61		二十七日	葛井神事	旧	
62		二十八日	神使御立御神事		
63	十二月	一日	朔旦神事	旧	
64		十五日	望日神事	旧	
65		二十二日	所末戸社神事		
66		二十三日	擬祝神事	旧・神	9
67		二十四日	大已神事		
68		二十五日	大夜明神事	旧・神	10
69		二十六日	祢宜送神事	旧・神	11
70		二十七日	新申神事	旧・神	12
71		二十八日	磯並神事		
72		晦日	御手倉送神事		

※「旧」→『旧記』のみに見られる神事

「旧・神」→『旧記』・神長本に共通する神事

表6　神長本と『旧記』の神事記事の比較

注記番号	神事名	神事日	神長本	旧記
1	御室神事	一月三日	同三日神事例儀	三日みむろ御神事藤沢つるまき田役四立御柏酒。祢宜、権殿、擬殿、副殿かゝみ一つゝ、雅楽十人三つゝ、やうとめけんこ三つゝ出。
2	打向御狩	一月四日	四日打向キノ御狩	四日うちむき御狩是はふてけのれう。さかむろにて御酒御こく神殿役。
3	七草粥神事	一月七日	七日カユ祝遣役神事、常ノコトシ。	七日みむろの御神事武井條七反三立御柏酒参、七々草粥まいる。祢宜、こん殿、きん殿、そい殿、もちかいあしおけ一つゝみむろへまゐらす
4	朔旦神事	二月一日	二月一日神事、大宮如常	二月一日大宮御神事、武井條五反二立例式。
5	佐久山田神事	二月十五日	同十五日、佐久山田神事例式タルヘシ	十五日御神事、佐久山田御神事ふつちやう四立御ふせ。
6	朔旦神事	三月一日	三月一日神事例禄	三月一日神田五反二立。御前は四立に勤仕申。
7	三日神事	三月三日	同三日神事如常	同三日神田一丁四立。大熊御柏、御酒、参神長持勤申。
8	磯並・前宮神事	四月九日	同九日磯並前宮舞楽御頭同前、一日三ヶ所也。	同九日磯並御頭例式、同前宮舞御頭例式。
9	擬祝神事	十二月二十三日	廿三日ハ擬祝神事小正体入畢	廿三日、き祝殿御神事、三立御柏、御酒、汁鳥参、例式小へひ入。
10	大夜明神事	十二月二十五日	同廿五日早旦大祝神長サシアヒノシユ／モン有、サテ其夜大夜明シ神事後、御神体三スチ入畢、後廿番歌舞有／カウトノヽ又鷹ツカウ時	廿五日、金子一丁四立。御柏、御酒、御前ますにて、申神事例式、ひめの御れう汁鳥参。
11	祢宜送神事	十二月二十六日	廿六日、家神事如常。	廿六日、祢宜をくりのあした、ねきともにみむろへ参て申立。
12	大夜明神事	十二月二十七日	廿七日、新申神事御室諸役如例、所々神役多シ。	廿七日、副殿神事一丁四立。汁鳥参、ひめの御れう参、神事例式。

（A）「神事記事の追加」異同内容一覧

	注記箇所	番号	月	日	神事名
1	四十四段	一	一月	三日	御室神事
2	四十四段	一		四日	打向御狩
3	四十四段	一		七日	七草粥神事
4	四十五段	一	二月	一日	朔旦神事
5	四十五段	一		十五日	佐久山田神事
6	四十七段	一	三月	一日	朔旦神事
7	四十七段	一		三日	三日神事
8	五十五段	七	四月	九日	磯並神事・前宮神事
9	七十八段	三・四	十二月	二十三日	擬祝神事
10	七十八段	三・四			大夜明神事
11	七十八段	一〇			祢宜送神事
12	七十八段	一〇			新申神事

（B）「神長官に関わる神事説明の異同」例の異同内容一覧

表８　（B－１）「神事説明の追加」

注記番号	神事日	神事名	神長本
13	一月一日	御占神事	神使の交代のあり方、神長官の役割を示す
14	二月晦日	荒玉社神事	御左口神祭祀の内容を示す
15	二月晦日	荒玉社神事	神使への饗応の膳の内容を示す
16	三月酉日	大御立座神事	神長官、神使・神主の所作を示す
17	三月酉日	大御立座神事	神使の所作を示す
18	三月酉日	大御立座神事	神原神事の内容を示す
19	三月酉日	大御立座神事	神使の巡回場所を示す
20	三月丑日	前宮神事	神長官の儀式所作を示す
21	三月寅日	大宮新事	神主の役目を示す
22	三月寅日	大宮新事	神主の神事例録を示す
23	三月寅日	大宮御祭	神原神事の内容を示す
24	三月辰日	祈宜送神事	奉納の内容を示す
25	三月辰日	祈宜送神事	神長官の儀式所作を示す
26	三月辰日	野焼神事	神使の所作を示す／諏神事を示す
27	三月巳日	新申神事	神殿中部屋における潔斎を示すか（現段階では未詳）
28	四月二十七日	矢崎祭	神事の場所を示す
29	四月二十七日	矢崎祭	神事の場所を示す／神事役の地域を示す
30	四月二十七日	矢崎祭	神事に用意する人形の数を示す（『旧記』との繋がり）
31	五月二日	御狩押立神事	神使の装束を示す
32	五月五日・六日	五月会頭	大祝の引き出物の内容を示す
33	七月晦日	御射山御狩神事	御頭役の決め方を示す
34	七月晦日	御射山御狩神事	神事の呼称を示す
35	十一月二十八日	神使御立御神事	神使の所作を示す
36	十二月二十四日～二十五日	大巳神事・大夜明神事	御左口神祭祀の内容を示す
37	十二月二十八日	鑄並神事	神事の例録を示す／神事の場所を示す
38	十二月晦日	御手倉送神事	神長官の所作を示す
39	十二月晦日	御手倉送神事	神事の言い伝えを示す／『旧記』との繋がり

表９　（B－２）「神事説明の書き換え」

注記番号	神事名	神事日	神長本
40	外県御立座神事	三月初午日	神事に関わる御頭役の名と、人数を示す
41	所末戸社神事	三月初午日	末社の呼称と数に差異あり
42	大御立座神事	三月酉日	神事に関わる御頭役の名を示す
43	大御立座神事	三月酉日	神長官の所作説明（権祝本と情報に差異なし）
44	大御立座神事	三月酉日	神事の流れを説明（権祝本と情報に差異なし）
45	大御立座神事	三月酉日	神事の流れを説明（権祝本と情報に差異なし）
46	大御立座神事	三月酉日	神主の所作説明（権祝本と情報に差異なし）
47	大御立座神事	三月酉日	神使の行う神事を示す
48	大御立座神事	三月酉日	神使の行う神事を示す
49	神原並人屋神事	三月戌～子日	神使の巡回神事の場所を示す
50	前宮神事	三月丑日	神使の神事説明（権祝本の情報と差異なし）
51	大宮御祭	三月寅日	神使の神事所作を示す
52	新申神事	三月巳日	神事奉納を示す
53	御狩押立神事	五月二日	神事の行列の順序の訂正
54	五月会頭	五月五・六日	神事に関わる社僧の人数の訂正
55	御射山御狩神事	七月二十七日	行列の騎馬数を訂正
56	御射山御狩神事	七月二十七日	行列の騎馬数を訂正
57	秋尾祭	九月下旬	神事の日程、神事の呼称を示す（『嘉禎記』との繋がり）
58	所末戸社神事	十二月二十二日	御左口神祭祀の所作を示す
59	御手倉送神事	十二月晦日	神事の流れを説明（権祝本と情報に差異なし）

表 10　（B－３）「神事説明の省略」

注記番号	神事名	神事日	神長本
60	大御立座神事	三月酉日	神使の所作を一部略す
61	大御立座神事	三月酉日	神事の流れの説明を一部を略す
62	大御立座神事	三月酉日	神使の所作を一部略す
63	大御立座神事	三月酉日	神事の情景描写を削る
64	大御立座神事	三月酉日	神事の情景描写を削る
65	大御立座神事	三月酉日	神事の情景描写を削る
66	前宮神事	三月丑日	神事の情景描写を削る

A Semantic Approach to English Teaching

Satoshi SHIGI

1. Introduction: The Problem of Japanese English Education and What English Teachers Should Do

This paper aims to show how semantics contributes to Japanese English education. To master a foreign language, we need to memorize many things including vocabulary, idioms, grammar, pronunciations, intonations, and so on. Memorizing is inevitable for a second language acquisition. Fujisawa(2007) suggests that teachers should teach basic rules of grammar first, and learners should practice the examples which they understand through listening or reading aloud or writing, repeatedly. Similarly, Kunihiro (1999) proposes that language learners should read aloud and transcribe the materials which they understand again and again, in order to master the language. Fujisawa(2007) and Kunihiro(1999) suggest that repeated practice can lead to the practical use of the language.

From a view point of second language acquisition study, Shirai(2004) points out the limitations of grammar explanations. It may be difficult or impossible for teachers to describe all grammatical items in words. Even if some teachers can, it may be impossible for the students to understand all of what the teachers say.(cf. Shirai 2004) Then Shirai(2004) proposes that teachers should simplify grammatical explanations and introduce many examples to increase students' 'input'. His proposal suggests that 'input' encourages the understanding of grammar.

Naturally, in Japanese English education, junior high and high school students need to memorize many things. One of the problems in school education is that the students tend to learn by rote. Ikegami(2006) states that rote learning is one of the problems in Japanese English education. Ikegami(2006) notes that when students practice rephrasing a sentence into another sentence, they have a tendency to think of two sentences as having the same meaning. Here are the examples;

(1a) John struck Bill.
(1b) Bill was struck by John. (ibid.: 68)
(2a) John taught Mary English.

(2b) John taught English to Mary. (ibid.: 80)

If we follow the theory of iconicity, i.e., "different forms, different meaning." as Ikegami(2006) does(ibid.:70), (1a) should not have the same meaning with (1b), neither do (2a) and (2b). If we know the differences of each sentence, we can choose the appropriate sentence depending on the suitable situation. From his study, the rote learning is not enough to lead to practical use.

To sum up, Ikegami(2006) suggests that rote learning is not enough since it does not apply to practical use. Shirai(2004) tells us the importance of simplification of grammar teaching. Fujisawa(2007) and Kunihiro(1999) suggest importance of repeated practice for the practical use of language.

Through reviewing these studies, we see that teachers can or should do the following two things in teaching English. First of all, teachers should have the ability to simplify each grammatical item. Then, of course, they should have the ability to explain each item to their students clearly and understandably. As Kuroda (2008) mentions, in this age of the Internet, students can get almost as much information as teachers if they want to. Teachers should teach simplified items clearly to their students all the more. Additionally, teachers should give them many examples.

Secondly, teachers should avoid the method that forces students only to memorize language as Ikegami(2006) points out. Teachers should lead their students to understand grammatical items. Even if it is impossible for students to understand grammatical items fully at the earlier point of teaching, teachers should guide their students to understand them sufficiently at some point, as the students' advances in their studies. Also, if some students have questions about some grammatical items, teachers should explain them to their students. Otherwise, students will simply tend to learn by heart. Likewise, teachers themselves should have a deep understanding of the grammatical items in order to fit each student's need. Teachers should have the attitudes to do so, even if it is too difficult to explain some grammatical items in words.

In summary, memorization (or 'input') encourages the understanding of the grammar. The understanding of grammar can help the memorization of many examples. Teachers attempt to connect memorization with the understanding of grammar of their students. To achieve the teacher's goal, teachers should do two things. First, they are to have the ability to simplify, secondly, to have a deep understanding of the grammatical items. These are not opposite things, rather they both supplement each other.

This study will pick up infinitive as a case study to focus on the deep understanding of a grammatical item, which understanding is needed for the effective

teaching as we have seen in the above.

In the following chapter 2, we shall review some previous studies of infinitive. In chapter 3, we shall point out some problems of previous studies. Then in chapter 4, we shall propose the alternative idea of previous studies and finally we shall conclude this paper in chapter 5.

2. Previous Studies

In this chapter, we will review previous studies of infinitives. From the view point of iconicity, i.e. the meaning and sign must be related to each other (cf. Tsubomoto 2009), the meaning of preposition *to* and *to* in *to*-infinitive must be related to each other. Many studies about infinitives are based on the idea of iconicity. In the following sections, we shall review some studies of infinitives based on the idea of iconicity. In 2.1, we shall review Shigi(2007).

2.1. End Point

In this section, we shall review Shigi(2007) which states that the meaning of preposition *to* is end point. Also the meaning of *to* in *to*-infinitive is end point from the view point of iconicity.

2.1.1. Shigi (2007)

Shigi(2007) concludes that the meaning of preposition *to* is end point. The definition of end point is stated as follows.

(3) *To* does not have the meaning of any motion or direction.
To shows just a point and this point is end point. (Shigi 2007: 3)

Shigi(2007) argues that when we think about the meaning of preposition *to*, we should not mix up the meaning of preposition *to* with the meaning of sentences or verbs. The example of *I went to the park* can be diagramed as follows.

(4). I went *to* the park.

(ibid.: 2)

THE FIGURE 1: THE MEANING OF *I WENT TO THE PARK.*

According to Shigi(2007), the sentence (4) means 'I reached the park'. *Went* (*go*) means 'to move to another place'. This 'dotted arrow' is the meaning of *went*, and meaning of *to* is an end point, it is shown by 'the circle'. Thanks to preposition *to*, the park can be interpreted as the 'arrival point'. (cf. ibid: 2)

Shigi(2007) attempts to apply the meaning of preposition *to* into all usages of the word *to*

in terms of the idea of iconicity, which includes the usages of *to*-infinitive. We shall see the one example from that study.

(5) I got up early *to* get the bus. (ibid.: 11)

Since *to* means end point, '*to* phrases' can be interpreted as 'some kind of arrival points' corresponding to the preceding sentences. That is, *to get the bus* is interpreted as 'a kind of arrival point' corresponding to *I got up early*. This is because *to* is an 'end point', and the interpretation of sentences depends on the context like 'the purpose' for (5) (cf. ibid. : 12).

2.1.2. The Problem of Shigi (2007)

Shigi(2007) considers the meaning of *to* and the meaning of sentences or verbs or '*to* phrases' separately. That approach is meaningful to analyze the meaning of words since many studies have mixed up the meaning of preposition to and the meaning of sentences as Shigi(2007) points out (cf. Lindstromberg 1997, Tyler & Evans 2003, 2005.) However, it does not explain all phenomena. The problem of Shigi(2007) is that the argument does not take into account the meaning of constructions. We not only consider the meaning of each word and the meaning of sentence separately, but we need to take account of the meaning of constructions. The following examples shall show the validity of that.

(6)Mary taught Bill French.
(7)Mary taught French to Bill. (Goldberg 1995: 33)

The difference of each sentence is that "[6] implies that Bill actually learned some French, that metaphorical transfer was successful"(ibid.). On the other hand, (7) does not have such implication.(cf. ibid.) Goldberg(1995) states that "the central sense of the ditransitive construction can be argued to be the sense involving successful transfer of an object to a recipient, with the referent of subject agentively causing this transfer."(ibid. 33) Also she states that the central sense of transitive construction like (7) is that a volitional actor affects an inanimate patient.(cf. ibid.: 118)

The approach taken Shigi(2007) cannot explain the differences between (6) and (7). In the approach, he only focuses on the meaning of words; *to* has the meaning of end point. In that case, the sentence (7) has to have the implication that *Bill* actually

learned some French since *to* has the meaning of end point. However, the sentence (6) has the implication that *Bill* actually learned some French as Goldberg(1995) states, though the sentence (6) does not have the word *to*, i.e. end point as Shigi(2007) says. Thus we see that Shigi(2007) fails to consider the meaning of constructions.

When we think about the meaning of *to*-infinitive, we should take into account the meaning of *to* plus infinitive itself, i.e. the bare forms of verbs. Shigi(2007) fails to consider the meaning of infinitive itself.

2.2. Direction Towards

In this section, we shall review Duffley(1992,2006) and Hashimoto(2006), which state that the meaning of preposition *to* is 'direction towards'.

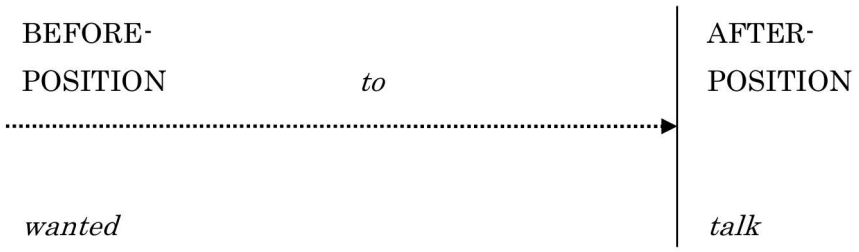
2.2.1. Duffley (1992, 2006)

Duffley(1992, 2006) studies on the English infinitive comprehensively. He takes a monosemy approach, that is, he supposes that "the basic meaning of *to* is the movement leading to a terminus" (Duffley 2006: 43), and he tries to apply to the meaning of *to*-infinitive in terms of temporal subsequence. Duffley(2006) states as follows.

> Since the basic meaning of preposition *to* is that of movement leading to a terminus, in its use of the infinitive this preposition evokes the event expressed by the latter as the end-point of a movement. This accounts for the feeling of a constant temporal relation of subsequence between the infinitive and the matrix, which has led some analysts to go so far as to posit a future tense operator in the infinitive. Since the infinitive's event, which *to* presents as the term of the movement, is a temporal entity, the notion of movement denoted by *to* is normally construed here in terms of time. (ibid. : 43)

Then, he gives two examples and shows the diagrams.

(8) I wanted to talk to Mary about it.

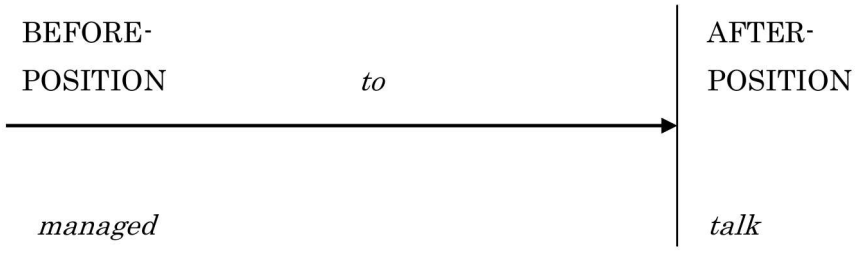


(ibid.: 44)

FIGURE 2: INFINITIVE EVENT EVOKED AS NON-REALIZED

(The dotted line indicates that the movement from the "before" to the "after" is understood as non-realized.)

(9) I managed to talk to Mary about it.



(ibid.: 44)

FIGURE 3: INFINITIVE EVENT EVOKED ACTUALLY REALIZED

(The solid line indicates actual realization of the movement leading to the realization of the infinitive's event.)

He explains the diagrams as follows.

> The event expressed by the matrix verb is understood to constitute a before-position in time with respect to that of the infinitive, which is therefore conceived as an after-position with respect to the matrix verb's event.(ibid.: 43)

The difference shown by Figure 2 and Figure 3 is the difference whether the each event expressed by the matrix verb evokes as non-realized or realized. The both of the sentences have in common with the temporal subsequence, and it was denoted by *to*. In other words, the event expressed by the matrix clause precedes that of the infinitive.

In the following section, we shall review the infinitive of reaction such as *I am glad to see you*, which seems the opposite sequence of event that Duffley (1992, 2006)

proposes.

2.2.1.2. The Infinitive of Reaction

In this section, we are concerned with the infinitive of reaction. The following examples are from Jespersen(1940: 259)

(10) I am glad (happy, delighted, pleased, proud, sorry, angry, ashamed, disappointed, surprised, astonished) to see you here.

Duffley(1992) observes that, in these examples, the clause that follows *to* infinitive event, 'the seeing' already realizes, and that is what brought about 'the gladness'. Duffley(1992) states that at first sight the sentences seem "the opposite sequence of event . . . which our hypothesis should have led us to expect"(Duffley 1992: 123) and considers the sentences comparing them with the sentences with *that* clause.

(11a) I am glad to know that he is safe.
(11b) I am glad that I know that he is safe. (ibid.:123)

He explains the differences between them as follows "[11a] presupposes the person referred to by *I* has been waiting for the news about someone whom he thought to be in danger, [11b] does not, and might be said rather by someone who is comparing himself with other people who do not know this fact"(Duffley 1992: 124). Similar examples are also stated.

(12a) I was glad to see the police car come around the corner.
(12b) I was glad that I saw the police come around the corner. (ibid.124)

He explains (12a) and (12b) as follows.

> While in [12b] the speaker is not represented as having any kind of expectations at all, in [12a], . . . the sentence with the infinitive means that speaker was hoping for someone to come to his assistance even before happened (ibid.).

The reason why *to* is used with the infinitive of reaction is summarized as follows.

> What is significant for understanding why *to* is used with the infinitive of reaction is that the notion of 'evaluation' implies a judgment as to whether the event was opportune or not, and the judgment involves an implicit reference to the situation as it existed before the infinitive event occurred (Duffley 1992: 125).

To sum up Duffley (1992), at first sight, the sentences of the infinitive of reaction seem to be exceptional since the events expressed in *to*-infinitive precede the events expressed in the matrix clause. However they are not the exceptional usages when we take into consideration the notion of evaluation, i.e. the judgment to make an evaluation precedes the occurrence of the infinitive event. Therefore we can assume the before-after relationship in the infinitive of reaction as well as other usages of infinitives stated in 2.2.1.

However, there still remains a question. In 2.2.1. in the *to*-infinitive, the event expressed by the matrix clause precedes that of the infinitive like (8)*I wanted to talk to Mary about it*. In the sentence (8), the two events are regarded as actual things. On the other hand, in 2.2.1.2, in the sentence like (10) *I am glad to see you here.*, the two events are regarded as notional things. The question is that why these differences occur. He does not explain why these are happening. In 2.2.1, he supposes *to* reflects the time subsequence of two events. Then in this 2.2.2, he proposes that *to* reflects the before-after positions if we regard the two events as notional things. Unless we regard the two things as notional things, the subsequence of two events is opposite as Dufley expects. This reason has to be explained, or the supposition that *to* reflects the time sequence may be wrong.

2.2.2. Hashimoto(2006)

In this section, we shall review Hashimoto(2006). He considers how to teach *to*-infinitive effectively. Hashimoto(2006) also describes the meaning of preposition *to* as "direction", and he states that the meaning can apply to the expressions of *to*-infinitive. He displays the image schemas of preposition *to* and *to*-infinitive as follows.

(13) ⇒

(ibid.: 59)

FIGURE 4 :THE IMAGE OF PREPOSITION *TO*

(14) ⇒ | Action and the like | (ibid.: 59)

FIGURE 5 : THE IMAGE OF *TO*-INFINITIVE

Using these image schemas, he explains several grammatical items such as the differences between the meaning of *will* and *be going to*, and *must* and *have to*, and the meaning of <*be to*-infinitive> and so on. We shall see the examples of <*be to*-infinitive>.

(15) a. The President is *to* visit London next week. (Plan)
b. You are *to* do your homework before watching TV. (Duty)
c. The key was not *to* be found anywhere. (Possible)
d. If you are *to* succeed, you must work harder. (Intention)
e. They were never *to* meet again. (Destiny)
(ibid.: 64)

Hashimoto(2006) says that many study guides explain <*be to*-infinitive> as having the above five meanings, that is, <*be to*-infinitive> has many meanings such as 'plan', 'duty', 'possible', 'intention', 'destiny' as stated above. According to Hashimoto(2006), the problem is that many teachers in high school just tell the students the lists of the meaning of <*be to*-infinitive>, and students just memorize them. Then he argues that teachers should teach <*be to*-infinitive> as the item related to the meaning of preposition *to* like "The Subject (be) [in the direction of] the clause that follows *to*-infinitive."(ibid.: 64) We can interpret the <*be to*-infinitive>as follows.

(16) The president is ⇒ [to visit London next week].
(17) You are ⇒ [to do your homework before watching TV]. (ibid.:64)

In (16), *The president is* [*in the direction of*] *visiting London next week,* and in (17), *You are* [*in the direction of*] *doing your homework before watching TV.* He argues that this explanation can easily explain why <*be to*-infinitive> has various meanings, and he continues to argue that what seems as the meanings of <*be to*-infinitive> is not the meaning, but rather they are just interpretations of the meaning of the sentences with <*be to*-infinitive>(cf.: Hashimoto 2006).

The proposal of Hashimoto(2006) seems useful to teach English at one point.

However his teaching methods with *to*-infinitive do not seem to apply to the part of the usages of *to*-infinitives such as the infini1tive of reaction (see 2.2.1.2). In his approach, the infinitive of reaction should be treated as the exception of infinitive.

2.3. The Infinitive in Causative Constructions

In this section we shall review some studies of the infinitive in causative constructions.

2.3.1. Tsubomoto (2009)

Tsubomoto(2009) argues about the causative verbs from the view point of 'iconicity'. Some causative verbs take bare infinitive such as *make*, *have*, *let*, and other verbs take *to*-infinitive such as *get*, *force*, *allow* and so on. Tsubomoto(2009) follows Duffley(1992)'s idea that the notion of movement denoted by *to* is construed in the *to*-infinitive in terms of time. Therefore, *to*-infinitive reflects the temporal subsequence of two events that is expressed in the matrix clause and the clause that follows *to*-infinitive, whereas the bare infinitive reflects the closeness of time, or coincidence since there is no *to*. Tsubomoto(2009) mentions that the existence of *to* makes a difference of the meaning of the bare-infinitive and *to*-infinitive. Then he takes the following examples.

(18) He made us laugh.
(19) He got us to laugh. (Tsubomoto 2009: 10)

According to Tsubomoto(2009), (19) implies that *he* made some efforts to achieve the result before *we* laughed. The existence of *to* reflects the causer's action, i.e. *he got us*, precedes the [1]causee's action, i.e. *we laugh*. On the other hand, (18) implies that the causative event and the result that was caused by the causer realized simultaneously. Therefore, we need not to put *to* in front of the infinitive to show the precedent of time. In the causative constructions, *to* reflects the subsequence of two events.

---

[1] The word "causee" is used by Duffley (1992), Hirose (1995), Hollmann (2005) as the meaning of the target which the causer's action intends.

2.3.2. Nakao and Koma (1990), Dixon (2005)

In this section, we shall consider the difference between the bare infinitive and *to*-infinitive from the view point of transitivity or directness. Nakao and Koma (1990) study it from the view point of transitivity. The term "transitivity" can be defined as 'the degree of affectedness of the object.'(cf. Hopper, & Thompson. 1980)

Nakao and Koma(1990) summarize the historical transition of the causative verb *make* with the forms of the complements as follows.

(20) OE		ME		PE
make that clause	⇒	*make* O *that*-clause		
		make O *to*-Inf	⇒	*make* O Ø-Inf

(ibid: 103)

They state this transition reflects that the transitivity of *make* is getting higher through the history. They argue that the complement of verbs can be decided according to the degree of transitivity, that is, if the transitivity of verbs gets higher, those verbs have difficulty to take *that*-clause and tend to occur with infinitive. In other words, they argue that infinitive is used when the transitivity is high.

Dixon (2005) argues that 'directness' plays its role in the use of infinitive, and when directness is high, bare infinitive is used, and when directness is low, *to*-infinitive is used. The 'directness' of the verbs in the matrix clauses relates to the choices of the forms of bare-infinitive or *to*-infinitive in the complement clauses. Before seeing his examples of causative verbs, we shall see the examples of *help*.

(21a) John helped me to write the letter.
(21b) John helped me write the letter.

He mentions "sentence[21b]—without *to*—is likely to imply that John gave direct help" (ibid; 252) such as "writing alternate paragraphs.(ibid.: 251)" On the other hand, "[21a] is more likely to be used if he gave indirect assistance" (ibid; 252.) such as providing pen and ink or suggesting some appropriate phrases and so on.(cf. ibid. 251) Then he says "semantic principle explains, at least in part, the inclusion or omission of *to* with MAKING verbs."(ibid.: 252) He states that the causative verbs *make* and *let* can be explained through this idea comparing with *cause* and *allow* respectively. The examples are as follows.

(22a) You made me burn the toast by distracting my attention.

(22b) He caused Mary to crash by almost cutting through the brake cable and then sending her down the mountain road.

(23a) Mary let John mow the lawn.

(23b) Mary allowed John to mow the lawn.

(22a) implies the direct causative action from the causer *you* to the causee *me*. On the other hand, (22b) does not imply the direct causative action. As for (23), he states "*let* focuses on the main clause subject, and the effect it has on the subject of the complement clause."(ibid.: 252) Then, he supposes *let* have the meaning of 'directness', and that is why *let* does not take *to* in front of the infinitive.

However, there still remain some questions as he states the following;

> This does not, however, explain why *force*, within often relates to coercion, takes *to*; and why the causative sense of *have*, which may involve some indirect means, omits *to*.(ibid.)

The problem of Dixon (2005) seems that the definition of 'directness' is not clear. Although it seems similar to transitivity, we do not know what the 'directness' is definitely.

2.3.3. Relationships between Causer and Causee

Tsubomoto(2009) suggests that we should consider not only the 'transitivity' or 'directness', but also the relationships between the causer and the causee. *Have* does not have any meaning of transitivity or directness when it is used in the causative constructions. Nevertheless, this verb takes the form of bare-infinitives like the following sentence.

(24) I'll have him clear up this mess. (ibid.: 8)

Tsubomoto(2009) analyses this is because the causee's attitudes are cooperative to the causers when the verb *have* is used in the causative constructions. Unless such attitudes are implied, the sentences with causative verb *have* are unacceptable as follows.

(25)*I had the squirrel leave its tree. (ibid.: 11)

According to Tsubomoto (2009), in the sentence (24), the achievement of the causer's action is implied simultaneously when the causer's action occurs, for the causee's attitudes are cooperative to the causer. Therefore the verb *have* can take the bare infinitive, though the 'transitivity' or 'directness' of the causer's action is not high.

2.4. The Summary of The Previous Studies

In this chapter 2, we have reviewed some previous studies. In 2.1, the study of Shigi(2007) suggests that we should take account of the meaning of infinitive itself when we think about the meaning of *to*-infinitive. In 2.2, from the study of Duffley(1992, 2006), we suspect the validity of his supposition that *to* in *to*-infinitive reflects the temporal subsequence. In 2.3, from the studies of causative verbs, we have seen the difference between *to*-infinitive and bare infinitive. From the view point of iconicity, to reflects the temporal subsequence, and bare forms reflect the closeness of time, or coincidence (cf. Tsubomoto 2009). Also we should need to take into consideration of the notion of transitivity or directness (cf. Nakao and Koma 1990, Dixon 2005).

3. The Problems of Previous Studies

In this chapter, we shall analyze the previous studies and point out the problems of previous studies.

3.1. The Meaning of Infinitive

In 2.1., we notice that *to*-infinitive is made up of *to* plus infinitive. First of all, we shall consider the meaning of infinitive.

Wada(1992) points out the infinitive itself has the meaning of 'unreality', the things which are not actual. That is why we use the infinitive in the imperative form or subjunctive or the position after the auxiliary verbs(cf. ibid: 74).

Tomoshige(2002) observes that it is generally said that *to*-infinitive has the meaning of 'future oriented' such as hypothetical, possibility, especially comparing it with gerund, which is said that it has the meaning of facts, actual accomplishments like the followings.

(26) She hoped to learn French.(possibility)
(27) She enjoyed learning French.(actual accomplishment)

(Tomoshige 2002: 133)

(26) implies the possibility of leaning French. (27) implies 'she' actually learned French. However, he states there are the examples that do not follow the each meaning.

(28) I'm interested in working in Switzerland. Do you know anybody who could help me?
(29) I was interested to read in the paper that scientists have found out how the universe began.

(ibid.: 144)

The gerund in (28), i.e. *working* expresses the thing which has not been realized yet. Also the *to*-infinitive clause in (29), i.e. *to read* expresses the thing which happened before *I* got interested. He concludes that the meaning of 'future-oriented' seen in the *to*-infinitive is only just a general tendency. Of course he admits that there is the tendency; *to*-infinitive tends to express 'future events', however it cannot express the whole thing. We may suppose that his conclusion is reasonable. Or we can say that it is

a natural result, for we suppose the meaning of the infinitive itself is 'unreality' as Wada(1992) points out. The notion of 'unreality' can easily be connected with the future events, on the other hand, it cannot express the past events since the past events were already realized, and they cannot match the notion of 'unreality'.

3.2. The Problems of Duffley (1992, 2006)

Duffley(2006) supposes that "the basic meaning of *to* is the movement leading to a terminus"(Duffley 2006 : 43), and he tries to apply to the meaning of *to*-infinitive in terms of time sequence. Tomoshige (2002) mentions that the meaning of 'future oriented' in the *to*-infinitive is just a general tendency, the temporal subsequence, which the event of the matrix clause precedes the events of *to*-infinitive clause, should also be just a tendency. Duffley tries to apply the meaning of the basic meaning of *to* to the infinitive of reaction such as the sentence, *I am glad to see you here*, it cannot be acceptable since the actual sequence of events are opposite. He fails to take into consideration of the meaning of infinitive itself fully the samel as Shigi(2007), though he noticed that *to*-infinitive was made up of *to* plus bare-infinitive.

3.3. The Causative Verbs Used with Infinitives

Tsubomoto(2009)'s approach is not accurate. He thinks the difference between the bare infinitive and the *to*-infinitive is the difference between the coincidence and the precedent of time based on Duffley(1992)'s approach. The fundamental problem of previous studies we have seen in chapter 2.3 are that they treat the event of the matrix clause and the notional thing expressed by the infinitive / *to*-infinitive clause as the equal rank, using the actual event's temporal subsequence. However, the event expressed in the matrix clause and the notion expressed in the infinitive / *to*-infinitive clause cannot be compared as the temporal subsequence of actual (realized) events. Since the infinitive itself is not actual, it cannot be compared with the two clauses theoretically.

3.4. Analysis of Previous Studies

The previous studies such as Shigi(2007), Duffley(1992, 2006), Tsubomoto(2009) fails to consider the meaning of infinitive itself. Duffley(1992, 2006) and Tsubomoto (2009) assume that the *to* in front of the infinitive reflects the temporal

subsequence derived from the meaning of preposition *to* "the movement leading to a terminus"(Duffley 2006: 43). The meaning of temporal subsequence is applied to the causative constructions used with infinitive, that is, the existence of *to* reflects the precedent of the event of the matrix clause and the absence of *to* reflects non-subsequence of time in the sentences. (cf. Duffley 1992, Tsubomoto 2009)

The matter is not quite as simple as those previous studies suggest. When we think about causative events, we suppose the causer and the causee. Then apparently the causer's action precedes the causee's action. The sentence like (18) *He made us laugh.* applies to it as well, that is, causer's action *he made us* precedes the causee's action 'laugh'. The difference between the bare-infinitive and *to*-infinitive is not only the matter of temporal subsequence, but the degree of achievement in the event expressed by the verbs of the matrix clause.

Also if there is the meaning of temporal subsequence in *to*-infinitive, it is hard to imagine that the subsequence can be opposite as in the reaction of infinitive, even if we can suppose the before-after sequence when we regard the events as notional things. This fact leads us to throw a doubt on the assumption of the meaning of the *to*-infinitive; temporal subsequence.

It should be concluded that the previous studies are wrong in their assumptions that *to*-infinitive shows the subsequence of time. As Duffley himself points out at one point, "studying the *to* infinitive all by itself neglects the obvious fact that it is made up of *to* plus bare infinitive."(Duffley 1992: 2) However, his approach is based on the temporal subsequence of the event of the matrix clause and the *to*-infinitive clause as the before position and after position. The fundamental problem is that he fails to take account of the meaning of infinitive itself, though he notices that *to*-infinitive is made up of *to* plus infinitive.

4. Consideration

From the argument of 3.4, we have a doubt that *to* does not mean the temporal subsequence of its own. Now our concern is to consider what the *to* functions or how it contributes to the meanings of the sentences with *to*-infinitive. In the following 4.1, in order to consider the functions of *to*, we shall compare 'the verbs used with infinitive' with 'the verbs used with *to*-infinitive' in the causative constructions.

4.1. Infinitives in Causative Constructions

The causative verbs with bare-infinitive, such as *make*, *have*, *let*, focus on the achievement or the effect of causer's action. At the same time, the constructions are implied that the causee's actions are also accomplished. On the other hand, the causative verbs with *to*-infinitive, such as *force*, *allow*, *get*, focus on how the causative actions occur, in other words, the causative manner is focused. Let us take some examples.

4.1.1. Causative Verbs: *force* vs. *make*

Let us compare *force* with *make*. *Force* takes a *to*-infinitive and *make* takes a bare infinitive. The following examples are from Duffley (1992).

(30) He forced me to laugh.
(31) He made me laugh. (Duffley 1992: 67)

> "In [30] one gets the impression of a person laughing against his own will, because of some external coercion." (Duffely 1992: 67)
> In [31] the first reading is "he provoked my laughter" without any independent intervention of 'me'.…The second reading, a note of coercion, or rather moral suasion, can be felt, but even here one gets the impression that 'he' reduced any opposition so that the cause was…a mere instrument acting under coercion. (ibid: 67)

Hollmann(2005) mentions that if we put adverbs which imply gradualness, the acceptability of the sentence with the causative verb *make* gets lower.

(32) ??The police finally made him confess to the crime. (Hollmann. 2005: 12)

In short we can summarize the difference between *force* and *make* as follows.

(33) *Force* (*to*-infinitive) focuses on how the causative action occurs; the causative manner.
Make (bare infinitive) focuses on the achievement of the causative events.

(33) shows that the meaning of *force* and *make* has a different focus. It does not show *to* reflects the temporal subsequence.

4.1.2. Causative Verbs: *allow* vs. *let*

Allow and *let* have the meaning of permission, but *allow* must be followed by *to*, *let* takes only the bare infinitive. (Duffley 1992: 83) The differences between them can be shown in the following examples.

(34a) I *allowed* him *to do* it, but he didn't do it.
(34b) *I *let* him *do* it, but he didn't do it.
(35a) I don/ didn't *allow* him *to do* it, but he does/ did it.
(35b) *I don't/ didn't *let* him *do* it, but he does/ did it. (ibid.: 85)

These examples suggest when the causer *let* causee *do*, the realization of the action permitted is implied at the same time, on the other hand, *allow* does not have such an implication of the realization (cf. ibid: 85). Similarly, Dixon points out "*let* focuses on the main clause subject, and the effect it has on the subject of the complement clause"(Dixon 2005: 252)

In short we can summarize the difference between *allow* and *let* as follows.

(36) *Allow* (*to*-infinitive) focuses on the causative manner.
Let (bare-infinitive) focuses on the achievement of the causative events.

The same as 4.1.1, to does not reflect the temporal subsequence, rather it reflects the difference of focuses.

4.1.3. The Meaning; Bare Infinitive vs. *to*-Infinitive

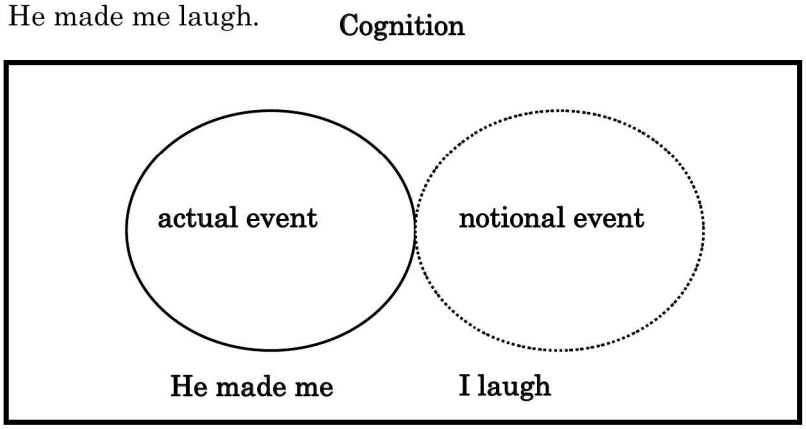
As we have observed the previous sections in 4.1.1 and 4.1.2, the causative constructions with bare-infinitive, i.e., *make* and *let* focus on the achievement or the effect of causer's action, that is, they are implied that the causee's actions are also accomplished. On the other hand, the causative constructions with to-infinitive, i.e., *force*, *allow* focus on how the causative actions occur, that is, the causative manner is focused.

Now let us consider what is the difference between the bare infinitive and *to*-infinitive is in meaning in the causative constructions. As we have seen in chapter 3.4, it is not appropriate to say that the bare infinitive sentences reflect the coincidence of two events. If *to* does not reflect the temporal sequence, we need to propose the alternative idea of *to*.

4.2. Alternative Idea of *to*

We would propose here that the bare infinitive sentences are interpreted as one unit, while *to*-infinitive sentences are interpreted as two units. The number of units represents our cognitions. First, let us take the example of bare infinitive using the sentence (31)*He made me laugh.* as (37). It can be diagramed as Figure 6.

(37) He made me laugh.



FIGIRE 6: CAUSATIVE VERB WITH BARE INFINITIVE

Figure 6 shows the interpretation of sentence (37). The components of the unit are an actual event and a notional event. The left solid circle shows the actual event expressed by the matrix clause; *he made me*, and the right dotted circle shows the notional event

expressed by the infinitive; *laugh*. The rectangle enclosing the two circles shows our cognitions. It shows our cognition as one unit.

Next, let us take the example of *to*-infinitive using the sentence (30) *He forced me to laugh*. as (38). It can be diagramed as Figure 7.

(38) He forced me to laugh.

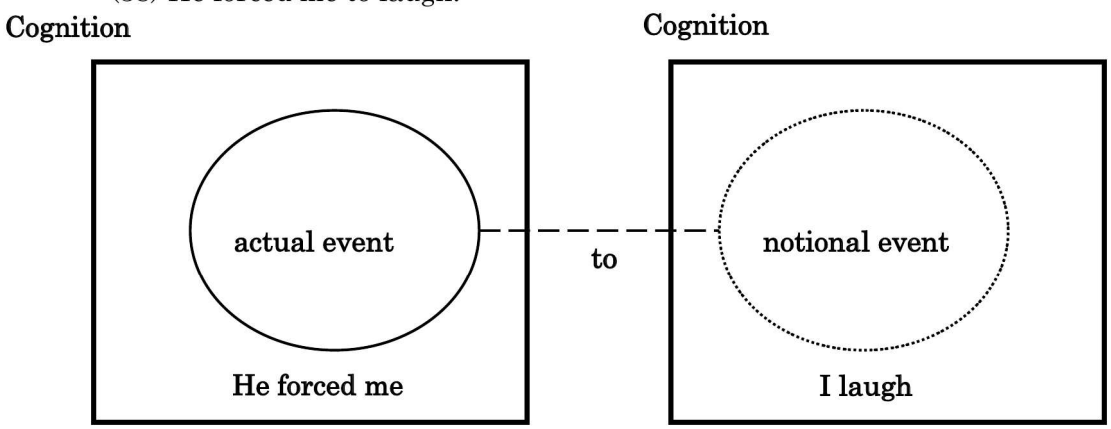


FIGURE 7: CAUSATIVE VERB WITH *TO*-INFINITIVE

Figure 7 shows the interpretation of sentence (38). The left solid circle shows the actual event; *he forced me*, and the right dotted circle shows the notional event; *laugh*. The line between them shows the marker of separating the actual thing from the notional thing; *to*. The two solid rectangles enclosing each circle show our cognitions. They show our cognitions as two units. Thanks to the existence of *to*, we can cognate each thing distinctively, and then we can focus on the causative manner and the notional event respectively.

The point is that *to* itself does not mean the temporal subsequence, i.e. the event expressed by the matrix clause precedes that of *to*-infinitive as Duffley (1992), Tsubomoto (2009) propose. The original meaning of *to*; 'direction towards' (cf. OED) evokes the distance between the two components in our interpretations.

Figure 7 shows that *to* itself does not mean the temporal subsequence. The *to* functions as the marker of separating the actual thing from the notional thing. Figure 6 and Figure 7 illustrate that our cognitions can produce the temporal sequence as a interpretation, but not the meaning of *to*. The significance of these figures is that we can take account of the meaning of infinitive itself, i.e. unreality (Wada 1992). In other words, infinitives show the notional things. This argument leads us to consider our perceptions, which has never considered through the previous studies.

In short, *to* functions as the marker of separating the actual thing from the notional thing. *To* does not mean the temporal subsequence of its own. A good point for showing these figures is that we can explain why the infinitive of reaction can occur in *to*-infinitive construction.

4.2.1. The Infinitive of Reaction

As we have seen in 2.2.1.2, at first sight, the reaction of infinitive seems to show the opposite event sequence that Duffley (1992) expects. If *to* reflects the temporal subsequence, we cannot explain 'the infinitive of reaction' such as *I am glad to see you*; *seeing you* precedes *I am glad* in temporal subsequence. This sentence also can be illustrated by the same figure as Figure7.

(39) I am glad to see you.

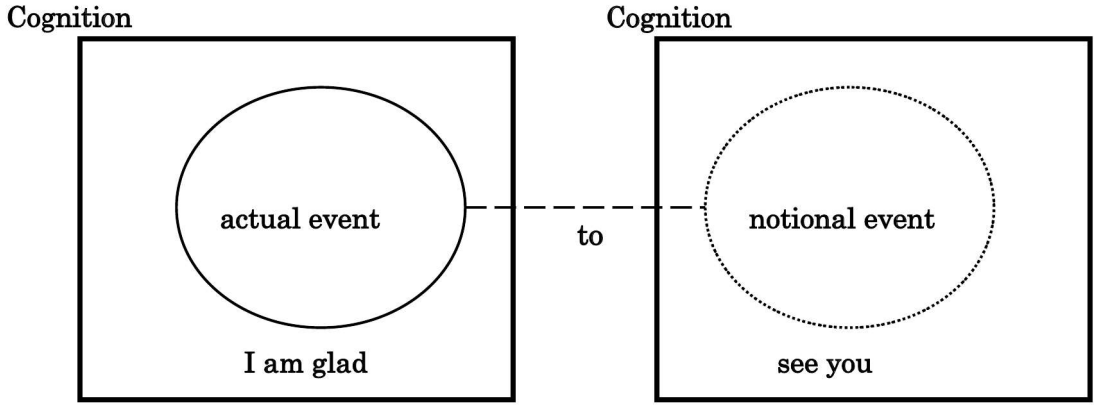


FIGURE 8: THE INFINITIVE OF REACTION

Figure 8 shows the interpretation of (39). The left solid circle shows the actual state; *I am glad*. The right dotted circle shows the notional event; *see you*. The line between them shows the marker of separating the actual thing from the notional thing; *to*. The two solid rectangles enclosing each circle show our cognitions. The two rectangles show our cognitions as two units. Thanks to the existence of *to*, we can cognate each thing distinctively. The matrix clause, *I am glad* shows the present state, which indicates the state after changing from the different state. It cannot be connected with the future notion. Then we can interpret the infinitive clause as the cause. Again, *to* functions as the marker of separating the actual thing from the notional thing. *To* does not mean the temporal subsequence.

When we mention that *to* does not mean the temporal subsequence in *to*-

infinitives, it does not mean that we deny the tendency of interpretation of 'futurity'. In fact, many examples are interpreted as future events in *to*-infinitives. This is because the meaning of infinitive is 'unreality' (cf. Wada 1992), and the notion is easily connected to future events.

5. Conclusion

One of the problems in Japanese English education is that the students tend to memorize many grammatical items mechanically without understanding them. To begin with this paper, we are concerned about what teachers should do in English teaching. Teachers should attempt to connect the memorization with the understanding of grammar of their students. Teachers should have the ability to simplify the complex grammatical items. At the same time, teachers have to understand each grammatical item deeply to match the variety of students' needs, and not to lead their students to do a memorization-only study. To achieve the goal, we have taken up the infinitive as the case study.

Many studies attempt to explain that *to* in front of the infinitive reflects the temporal subsequence derived from the meaning of preposition *to* "the movement leading to a terminus"(Duffley 2006: 43). However, this cannot explain the whole phenomenon such as *I am glad to see you.* The expected temporal sequence is opposite direction in the sentence. The failure of the previous studies is that they do not concern with the meaning of the infinitive itself, i.e. unreality.

To-infinitive is made up of *to* plus infinitive, therefore we should consider the meaning of infinitive, too. We regard the meaning of infinitive as 'unreality', and we can conclude that *to* does not reflect the temporal sequence in the infinitive sentences. *To* functions as the marker of separating the actual thing from the notional thing. Finally we can see the temporal sequence is produced not by *to*, but our cognitions shown in Figure 6,7, and 8.

Reference Cited

Dixon, R.M.W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Duffley J, Patrick (1992) *The English Infinitive*. London and New York: Longman.

---. (2006) *The English Gerund-Participle: A Comparison with The Infinitive*. New York: Peter Lang Pub Inc.

Fujisawa, Kohji. (2007) Nihonjin ga Eigo wo Mono ni Suru Ichiban Kakujitsu na Benkyouhou[The Best Methods to Acquire English for Japanese]. Tokyo: Mikasashob

Goldberg, Adele. (1995) *Constructions: Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press

Goldberg, Adele. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: The University of Chicago Press. （河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳（2001）『構文文法論』 東京：研究社.）

Hashimoto, Masafumi (2006) "*To* Futeishi ga Imisurumono"[The Thing Which *To* Infinitive Means] in Kyoto Kyouiku Daigaku Kenkyuu Kiyou[The Collected Papers of Kyoto University of Education] 79. pp. 58-67.

Hollmann, Willwm. (2005) The Iconicity of Complementation in Present-day English Causatives In: Maeder, Constantino and Fischer , Olga and Herlofsky , William J., (eds.) Outside-in - inside-out : Iconicity in language and literature 4. John Benjamins, Amsterdam, pp. 287-306.

Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse" in Language 56: 251-299.

Ieiri, Yoko. (2007) "Shiekidoushi *Make* no Shitekihattatsu ni Kansuru Ichikousatsu—— *Caxton* no *Reynard the Fox* wo Chuushin ni" [A Study on The Historical Transition of Causative Verb *Make*—— Focusing on *Caxton*'s *Reynard the Fox*] in Eigo Shi Kenkyuukai Kaihou Kenkyuu nooto [The Collected Papers in a Studying Group of English History] pp. 18-24. Osaka: Osakayousho.

Ikegami, Yoshihiko. (2006) Eigo no Kankaku, Nihongo no Kankaku [The Native Instinct of English and Japanese]. Tokyo: Nihon Housou Shuppan Kyoukai.

Jespersen, Otto. (1940) A Modern English Grannar. (Part V) London: George Allen and Unwin.

Kunihiro, Masao (1999) Kunihiroryu Eigo no Hanashikara[How to Speak English Language; The Style of Kunihiro]. Tokyo: Tachibanashuppan.

Kuroda, Ryunosuke. (2008) Gogaku ha Yarinaoseru.[You can Start Over Again in Your Language Learning] Tokyo: Kadokawashoten.

Lindstromberg, Seth. (1997) ENGLISH PREPOSITION EXPLAINED. Amsterdam The Netherlands:John Benjamins Publishing Co.

Nakao, Toshio. & Koma, Osamu. (1990) Rekishiteki ni Saguru Gendai no Eibunpou [The Historical Analysis of Present English Grammar]. Tokyo: Taishuukanshoten.

Shigi, Satoshi. (2007) "The Semantics of Preposition *To*" Graduation Thesis. Shinshu University

Shirai, Yasuhiro. (2004) Gaikokugo Gakushu ni Seikou suru Hito, Shinai Hito [The People Who Succeed in Learning Foreign Languages and The People Who Do Not]. Tokyo: Iwanami.

Sugiyama, Chuuichi. (1998) Eibunpou Shoukai [A Comprehensive English Grammar]. Tokyo: Gakkenkenkyuusha

Tomoshige, Yoshinori. (2002) "Doumeishi to Futeishi no Imiron" [Semantic Aspects of Gerunds And Infinitives] in Himeji Kougyou Daigaku Kankyouningengakubu Kenkyuuhoukoku [The Collected Papers of Himeji Institute of Technology, School of Humanities for Environmental Policy and Technology] 4. pp. 133-147.

Tsubomoto, Atsurou (2009) "Chikaku to Shieki no Katachi to Imi—— <Hadaka Futeishi> to <*To* Futeishi>" [Causation and Perception: Iconicity and Infinitive marker —— <Bare Infinitive> And <*To* Infinitive>] in Kotoba to Bunka[Language and Culture] 12. pp. 1-15. Shizuoka: Shizuoka Kenritu Daigaku

Tyler, A., & Evans, V. (2003) Eigo Zenchishi no Imiron [The semantics of English Prepositions]. Translated by Kunihiro Tetsuya & Motomura Tetsuya. Tokyo: Kenkyusha

---. (2005) "Rethinking English "Prepositions of Movement": The Case of *To* and *Through*" in H. Cuyckens, W. de Mulder & T. Mortelmans (Eds.), Adpositions of Movement (Belgian Journal of Linguistics, 17). pp. 240-270. Amsterdam: John Benjamins.

Wada Shiro. (1992) "*To* Futeishi ni okeru Houkousei" [Direction of *To* Infinitive] in Kobe Gaidai Ronsou [The Collected Papers in Kobe University of Foreign Studies]. 43 No.4 pp. 65-87

Oxford English Dictionary, 2nd. ed. on CD-ROM. Oxford University Press

Bibliography

David, Crystal. (2005) *The Stories of English*. New York: The Overlook Press.

Fukawa, Kinya. (2004) "Yokakukoutai niyoru Doushi / Zenchishi no Imi to Koubun no Kakawariai" [A Lexical Semantic Account of the Relation Between Verbs/Prepositions and Constructions: The Case of Dative Alternation in English]. in *Gengo Kenkyu no Uchuu* [The Universe of Linguistics Research]. pp. 316-328. Tokyo: Kaitakusha

Hirose, Kozou. (1995) "Gendai Eigo ni Okeru Genkeifuteishi no Bunpu to Sono Ukemibun no Tokuchou ni Tsuite" [The Expressions of Bare Infinitive and The Characteristics of The Passive Forms in The Present English] in Shimane Daigaku Houbungakubu Kiyou[The Collected Papers in The Faculty of Low And Literature, Shimane University] 24. pp. 105-138

Kato, Kozo., & Hanazaki, Miki. (2007) "Tyler&Evans no *Over* wo Hihansuru"[Criticism Against the Study of *Over* by Tyler and Evans] in Shinshu Daigaku Jinbun Kagaku Ronshu<Bunka Komyunikeishon Hen>)[The Collected Papers in Faculty of Arts of Shinshu University<Cultural Communication Discipline Edition>]. 41 pp.19-35

Konishi Tomoshichi (1976) Eigo no Zenchishi [Presositions in English]. Tokyo: Taishuukan.

Kuno, Susumu., & Takami, Kenichi. (2005) Nazotoki no Eibunpou[Problem-Solving English Grammar]. Tokyo: Kuroshioshuppan.

Matsumoto, Yo. & Tanaka, Shigenori. (1997) Kuukan-to Idou-no Hyougen [The Expressions of Space and Movement] Ed. Nakau Minoru Tokyo:Kenkyu-Sha.

Okuno, Hiroko. (2002) "Gohou Kenkyuu To death has been annoying me to death-to death wa Kekka Ku ka Kyoui Ku ka"[A Study on Grammer To death has been annoying me to death- Is 'to death' the result phrase or intensive phrase?] in Eigo Seinen. [The Rising Generation]. 148 No.2. pp. 122-123, 142. Tokyo: Kenkyu-Sha.

Okuno, Tadanori. (2008) "Eigo Zenchishi *To* no Imiron" [A Semantics of English Preposition *To*]. in *Gengo Kenkyuu no Genzai* [Present Linguistics Research]. pp. 194-204. Tokyo: Kaitakusha.

Onishi, Hiroto. (2003) Ei Bunpou wo Kowasu. [An Attempt to Break the English Grammar]. Tokyo:Nihon Housou Shuppan Kyoukai.

Onishi, Hiroto. & Macvay, Paul, Chris. (1996) Neitibu Supiikaa no Zenchishi [Prepositions for Native Speakers] Tokyo: Kenkyuusha.

Otsu, Eiichiro. (1993). Eigo no Kankaku (jyou). [A Feeling for English (The First Volume)]. Tokyo: Iwanamishoten.

---. (1993) Eigo No Kankaku (Ge) [A Feeling for English (The Second Volume)]. Tokyo: Iwanamishoten

Otsuka, Tatsuo. (2005) "On the Thematic Roles of Goal and Recipient in the Dative Alternation in English" in Chiba Daigaku Kyouikugakubu Kenkyuu Kiyou[The Collected Papers in The Faculty of Education of Chiba University] 53 pp. 259-264.

Petersen, Mark. (1988) Nihonjin no Eigo [Japanese English]. Tokyo: Iwanamishoten.

---. (2010) Nihonjin ga Gokaisuru Eigo [The English That Many Japanese Misunderstands]. Tokyo: Kobunsha.

Terasawa Jun. (2008) Eigo no Rekishi [The History of the English Language]. Tokyo: Chuoukouronshinsha.

Toshioka Tomomi. (2008) "Nijyuu Mokutekigo Koubun ni Arawareru Nimensei ni Kansuru Imiteki Kousatsu"[The Two Sides of Meaning on Double Object Construction]. in *Gengo to Ninchi no Mekanizumu* [The mechanism of Language and Cognition]. pp. 47-59. Tokyo: Hitsujishobou.

-Ueno Yoshikazu. (1995) Eigo no Shikumi—— Imironteki Kenkyu [The Mechanism of English—— Semantic Approach]. Tokyo: Eichousha

Ukaji Masatomo. (2000) Eigo Shi [The History of the English Language]. Tokyo: Kaitakusha

Ukaji Masatomo. (2001) "Futeishi no Rekishiteki Hattatsu"[Historical Development of Infinitive] in Eigo Seinen. [The Rising Generation] 147 (7). pp. 417-419.

Yoneyama, Mitsuaki (2009) Imiron kara Miru Eigo no Kouzou—— Idou to Jyoutaihenka no Hyougen wo Megutte [The English Structure Considered from The View Point of Semantics—— Through The Expressions of Movement and Change in State]. Tokyo: Kaitakusha

Wada Shiro. (1991) "Zenchishi *To* no Kinou to Imi" [The Function and the Meaning of Preposition *To*] in Kobe Gaidai Ronsou [The collected papers in Kobe University of Foreign Studies] 42 No.5 pp. 1-20

---. (1993) "*To* Futeishi no 「Mokuteki」to 「Kekka」Youhou" [The Usages of *To* Infinitive of "Purpose" and "Result"] in *Kotoba. Imi. Katachi* [Words, Meaning, Form] pp. 1-18. Tokyo: Aiikusha

Watanuki, Yo. & Yodonawa, Mitsuhiro. & Petersen, Mark. (1994) Kyoushi no Tame no Roiyaru Eibunpou [Royal English Grammar for Teachers] Tokyo: Obunsha

Williamson, Keith (2002) "The Dialectology of English; North of the Humber, c. 1380-1500" in Sounds, Words, Texts and Change:Selected Papers from 11 Icehl, Santiago De Compostela, 7-11 September 2000 (Linguistic Approaches to Literature) pp.253-286. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company

F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* における女性像

森木順子

はじめに

The Great Gatsby は Fitzgerald 自身が編集者 Maxwell Perkins への手紙の中で述べているように「男性の本」である。(*Letters* 92)男性主人公 Gatsby の人生を登場人物でもある語り手 Nick が語る構成で、さらに 1922 年の New York での出来事を 2 年後に故郷に戻った Nick が回想して書いているという設定である。したがってこの小説は Nick の視線で描かれており、彼のものの考え方が多分に反映されている。Nick はこの小説でいかに主人公 Gatsby が偉大だったかを語ろうとしているのだが、男性の話を語る上で女性をどのように取り込んでいるか興味のあるところだ。

この小説は第一次世界大戦後の 1920 年代初頭を舞台にしているのだが、戦後、戦争による幻滅感や開放感から激変した社会情勢が色濃く反映されている。この時期親世代の考え方に反発し、新しい価値観を身につけた女性たちが出現した。この新しい女性たちの姿がこの小説の女性キャラクターの中に刻印されている。語り手 Nick は女性たちをどのように語り、また彼女たちにどのような役割を持たせているか、「男性の本」である *The Great Gatsby* における女性キャラクターの意義を論ずることがこの論文の目的である。

1. Nick Carraway－なぜ Nick は New York にやって来たのか？

まず、語り手である Nick がどのような人間か考察する。彼がどんな背景を持った人物か、また彼の考え方を整理することで、どのような視点で物語が語られているか？言い換えれば、どのようなフィルターを通して物語が語られているのかが浮かびあがってくるだろう。

Nick はアメリカ中西部の中産階級の出身であり、父親からの影響を受け、一見すると保守的な環境を背景に育ったのではないかと考えられる。しかし、自己の判断基準となる父親からの忠告を彼なりに解釈している。その解釈は極めてリベラルだ。

> Reserving judgements is a matter of infinite hope. I am still a little afraid of missing something if I forget that, as my father snobbishly suggested and I snobbishly repeated, a sense of the fundamental decencies is parcelled out unequally at birth. (6、下線筆者)

Nick は「判断を控える」「他人を尊重する」という周囲に気遣う新しい考え方を身につけ、外見も気にする新しいタイプの男性だ。

さらに、第一次世界大戦に従軍した経験が彼の考え方に少なからぬ影響を与えている。

Nick は「アルゴンヌの森の戦闘」(70)[2] に参加しているのだが、兵士の中には初めて実際の戦闘に加わった者もおり、この戦いは凄惨を極めた戦いであった。このような過酷な経験をした Nick の考え方は 180 度転換してしまった。

> ...and a little later I participated in that delayed Teutonic migration known as the Great War. I enjoyed the counter-raid so thoroughly that I came back restless. Instead of being the warm centre of the world the middle-west now seemed like the ragged edge of the universe—so I decided to go east and learn the bond business. (7、下線筆者)

以前は「温かき世界の中心」であった故郷の町は「宇宙の果て」になってしまった。Nick はヨーロッパでの戦争は別世界の出来事で、全く影響を受けていないかのような故郷の町に違和感を覚える。彼は戦後の価値観の変化に対応していくにはどうしたらいいか悩み、自己を失いかけていた。新しい世の中での生き方を模索し、指針を求めて New York に出て来るのだ。彼はそこで Gatsby に出合い、自らを律し、下層階級から自力でのし上がっていこうとする、いわゆるセルフメイド・マンの Gatsby に新しい男性のモデルを見出すのだ。Nick は Gatsby を自分の理想の男性像として語るのだが、Gatsby を神話化するにあたり、女性キャラクターを上手く取り込んでいる。Nick が彼女たちにどんな機能を負わせたかを、次に見ていこう。

2. Daisy Buchanan—Gatsby の夢の化身

3 人の女性キャラクターはそれぞれ 1920 年代の新しい女性像の特徴を持っている。新しい価値観に目を向け、そこに活路を見出そうとしていた Nick は彼女たちの特色を上手く語っている。

まず、Gatsby の元恋人で、未だ想いを寄せている Daisy について考えてみよう。彼女に関して Nick は、Gatsby の想い人であり、同時に Gatsby の夢そのもの、夢の化身だと考えている。それ故、彼の語る Daisy は生身の女性というより観念的で、「この世のものとは思えない存在」(Sanderson [2008] 90-91)のようだ。Nick は Daisy の New Woman[3] としての洗練された部分を強調し、肯定的に語っている。この語り方は、また彼女から人間臭さを取り除き、非人間化することに貢献している。

もう一点、彼の Daisy を語る際の特色を考えれば、彼女の声の魅力を強調する手法を挙げることができる。彼は彼女の声の魅力を何度もくり返し語っている。彼女の声には男性を惹きつける何かがあるようだ。この声の魅力は詩的な表現でくり返し語られるので、彼

---

[2] 「アルゴンヌの森の戦闘」(1918 年 9 月 26 日～11 月 11 日)とはフランス北東部のドイツとの国境付近で起きた連合国（フランスとアメリカ合衆国）とドイツ帝国との間の戦闘。

[3] 1920 年代に現れた流行の先端を行く若い女性たち。最先端のファッションに身を包み、顎の線で髪を切り、ダンスや新しい考えに興味を持ち、慣習に縛られず自由に振舞おうとした。多くは裕福な階層の出身だった。

女の肉体は見えなくなり、Daisy と言えば「声」(14,101,127)という印象を読者に与える。つまり、彼女の実体ははっきり見えず、読者は彼女をある種の観念のように捉えるようになるのである。

彼女の声には性的魅力があり、男性を惹きつけるのだろうが、肉体がはっきりしないので、彼女の存在自体は生々しく感じられない。言い換えると、Gatsby と Daisy の関係は性を感じさせず婚外の関係のはずなのに、ロマンチックな感じさえ受けるのだ。

他方で Nick は Daisy を夫 Tom との関係では好意的に語っていない。Nick は Tom の古い男らしさを嫌っている。つまり、親から受け継いだ財力に物を言わせ、尊大な態度を取る Tom を時代遅れだと考えている。その対極にある Gatsby という自らの力で財を成し、禁欲的で努力を怠らず、繊細さを持ち合わせている新しい男を自分の理想だと認めた Nick なので、Gatsby の愛する女性と彼らの関係をプラスに捉え、生々しさを取り除き、観念化して語っているのだ。

しかし、Gatsby を捉えていた Daisy の声の真の魅力が Gatsby 自身によって暴かれたとき、Nick は態度を変える。

> "She's got an indiscreet voice," I remarked. "It's full of—"
>
> I hesitated.
>
> "Her voice is full of money," he said suddenly.
>
> That was it. I'd never understood before. It was full of money—that the inexhaustible charm that rose and fell in it, the jingle of it, the cymbals' song of it .... High in a white palace the King's daughter, the golden girl.... (127、下線筆者)

引用から分かるように、Nick は Gatsby を惹きつけている彼女の声の魅力の正体は金の力だと悟る。Myrtle の事故の後、Daisy が、自分が運転していたという事実を永遠に封印し、Tom と自分の世界に引っ込んでしまったとき、Nick は Daisy に興味を失い、彼は彼女を Gatsby の物語から締め出す。Daisy が Gatsby を理想化する役目を終えたとき（彼女は良家の子女で手に入れにくい存在であり、彼女を手に入れることを目標に掲げた Gatsby 自体を間接的に高めていると思われる）Nick は Daisy を Gatsby から切り離す。小説の最期 8、9 章では彼女本人は登場していない。

Daisy は Gatsby の夢として観念的、象徴的に語られた。その語り方は Daisy が手の届かない存在だと言うことも強調して語っている。Gatsby にとっては彼女が上流階級の人間だということが魅力になっているのだが、Nick にとっては Gatsby の対極にある Tom との結びつきは許し難く、最終的に彼女は Tom と同列の「不注意な人々 (careless people)」(187) として物語から排除される。

3. Myrtle Wilson－女性版 Gatsby

Myrtle は下層階級出身であり、うだつの上がらない夫、George Wilson に満足できず、上流階級の Tom と愛人関係を結んでいる。彼女は今の生活から抜け出そうと強い野心を持

っている。Nick は下層階級出身の Myrtle を New Woman としてではなく、1920 年代のアメリカの一般大衆の代表として語っている。彼女の消費行動は当時の大衆消費と結びついており、その消費によって形成された彼女自身の服装やインテリアからは洗練された趣味のよさは感じられず、安っぽく趣味の悪さが強調されている。こうして彼女は上流階級出身の Daisy と区別される。Nick は Gatsby を理想化、神話化するために Daisy と Gatsby、Myrtle と Tom という 2 組の関係に焦点を当てる。つまり、前者を理想化するため後者を不快なものにする必要があったのだ。そのため、Myrtle と Tom の関係を Daisy と Gatsby の関係に比べて性的なものにしなくてはならない。Daisy と Gatsby の関係が性を感じさせないことは 2 章ですでに述べたが、Myrtle が性的に描かれているのはこうした理由からだ。

Myrtle は自分の結婚相手に満足していない。彼女の不満は内部で燻り、不穏なエネルギーを発している。このエネルギーは彼女を消費に向かわせ、そして性的攻撃性を持った女性にする。彼女は今の生活から抜け出そうと、性的魅力を武器に上流階級の Tom の愛人になる。彼女は下の階級から這い上がろうとする強い野心を持った女性であり、この意味では女性版の Gatsby だと言える。しかし、彼女の用いる手段は性的なものなので、Nick は不快感を示す。Myrtle は、身を立てるために自分を律し、精神性を重んずる Gatsby とは対極にあり、Gatsby の理想的な部分、魅力となっている部分を取り除いた本能的なものを映し出している。むき出しの本能、強い野心は Daisy の運転する Gatsby の車に撥ねられ殺されたとき解き放たれるが、彼女の死体は罰を受けたかのように胸がもげていた。

> Michaelis and this man reached her first but when they had torn open shirtwaist still damp with perspiration they saw that her left breast was swinging loose like a flap and there was no need to listen for the heart beneath. The mouth was wide open and ripped at the corners as though she had choked a little in giving up the tremendous vitality she had stored so long. (145、下線筆者)

Nick は罰せられた Myrtle の死体を生々しく描くことで彼女の死と Gatsby の死を区別しようとした。前者の死は誰も気に止めず、やがては忘れ去られる死だが、後者の死は Nick によって追悼され、伝説となる。こうして Myrtle は間接的に Gatsby の理想化に貢献するのだ。

4. Jordan Baker－Nick はなぜ彼女を捨てたのか?

Jordan は Daisy の幼なじみであり、同じ上流階級の出身だ。彼女は 3 人の女性の中で、一番 New Woman の外見的特徴を見せている女性として語られている。彼女は当時のフラッパーたちが憧れた若さを強調する胸が小さく少年のような体型をしている。その若さは 1920 年代数々の英雄[4] を生み出したスポーツブームと結びつき、Jordan のキャラクターを

[4] 1920 年代、スポーツ界で活躍した代表的な人物は Jack Dempsy (ボクシング)、 Babe Ruth (野球)、Bobby Jones (ゴルフ)、 Helen Wills (テニス) などである。

形作っている。彼女はゴルファーとして有名であり、人に見られるという機能を持たされている。Nick は実際、彼女を連れて歩くことを得意がっている。彼女の姿は直喩を使い形容され、そこではスポーツウーマンの若さや爽やかさが強調されており、ヴィジュアルに訴える。

Nick は彼女のファッショナブルな外見を積極的に語っているが、一方で彼女の性格については否定的な見方をしている。彼は小説の初めの方で彼女の良くない噂について言及し、読者がそのことに引っ掛かりを持つような語り方をしている。その彼女の良くない噂は小説の第 3 章で Nick によって暴かれ、彼は Jordan を救い難い嘘つきだと評価する。Nick は自分自身を「正直(honest)」(64)だと強調し、語り手として信頼されるように仕向けているのと同時に、女性に積極的になれない彼の態度を言い訳するのにこの評価を利用している。彼のこの態度にホモセクシャル的傾向を見る批評家(Kerr 418-419)もいるが、Nick は戦後の新しい時代を生きて行く術を模索し New York に出てきたのであり、女性を求めて来たわけではない。彼の煮え切らない態度は生き方を模索している途上の混乱だと思われる。

では、なぜ彼は Jordan と付き合ったのか？Nick は男らしさについての問題を抱えていた。それ故、自足しているかに見える Jordan と付き合ったとする批評家(Suwabe 170-171)もいる。自足している彼女といれば男らしく振舞う必要性がないからだというのだ。しかし、Nick と Jordan はお互いに正反対の性格に惹かれたのだと思われる。ゴルファーとしてキャリアを持つ彼女は「頭のいい男性を本能的に避け(instinctively avoided clever shrewd men)」(63)、男性を自分の思い通りにしたいと思うような女性だ。一方 Nick は新しい価値観を持ち、自分を回りに合わせて行けるタイプの男であり、Jordan のような女性といて自然に振舞えるのだろう。プラザホテルで Gatsby が Tom の悪意によって打ち砕かれたとき、感傷的になった Nick は隣にいた Jordan に自分を託してもいいかと思う。しかし、Myrtle の事故の後、何事もなかったように Buchanan 邸に入るように誘う Jordan の態度に、彼は目が覚めるのだ。

> Jordan put her hand on my arm.
> "Won't you come in, Nick?"
> "No thanks."
> I was feeling a little sick and I wanted to be alone.
> But Jordan lingered for a moment more.
> "It's only half past nine," she said.
> <u>I'd be damned if I'd go in; I'd had enough of all of them for one day and suddenly that included Jordan too.</u> (149-150、下線筆者)

自分は単に女性を見つけるために New York にやって来たのではなく、漠然とではあるがそこで男性としての理想の生き方を探そうとしていたのだということを再確認し、彼は自分の人生を Jordan に託せないと踏みとどまる。彼は Buchanan 邸での Tom と Daisy の不穏な雰囲気に Gatsby を守らなければとならないと感じ、Nick の想いは Jordan から Gatsby

に劇的に移行する。彼はやっと出合った自分の理想のモデルである Gatsby を、自分自身を守るかのように守ろうとする。

Nick は Jordan の見かけの良さに惹かれ、さらに最先端を行く彼女と付き合えば生き方を見つけられると思ったのだが、自分の理想は女性の中には見出せないことに気づき、彼の想いは Jordan から Gatsby に向かう。Daisy と Myrtle が 7 章以後小説から消えてしまったのに対し、Jordan は最終章まで登場しているが、最後に Nick に捨てられるという手痛い扱いを受け、彼女も退場する。

おわりに

Nick がこの小説の最期に Jordan を捨てたということ、また次々に女性を排除して言ったことはこの小説が「男性の本」だということを象徴している。Nick は女性たちを次々に物語から締め出して行く。Daisy は声の魅力の正体が金の力ということで、俗物化した後に。Myrtle は夫の許(下層階級)から逃げ出し、車に撥ねられ、罰を受けた死体の描写の後に。Jordan は彼の想いが Gatsby に向かった瞬間に。

Nick は小説から女性を排除して行き、最期には George Wilson も死に、Tom を許すこともできず、完全に一人になり Gatsby と向き合う。Nick は Gatsby の夢とアメリカの夢を重ね合わす。ここに彼の Gatsby の神話は結実し、Gatsby だけを理想化することにより、男性としての Nick のアイデンティティは確認されたと言えるかもしれない。彼は Gatsby とうい指針を得て、明日に向かって生きていこうと未来に目を向ける。主人公が死んでしまう物語であるのに爽やかな読後感は語り手 Nick が過去を語りながらも、自分の理想の男性 Gatsby の中に希望を見出し、未来に向かって行こうとしているためであろう。

この小説において、3 人の女性の働きを考えるとき、Nick が Gatsby の偉大さを語るための装置のような役目を持たされていると言えるだろう。彼女たちはある種象徴的な存在であり、男性主人公を輝かせるために存在している。Nick は New woman と彼女たちの新しさを語りながら Gatsby の偉大さを強調するために用いているのだ。「男性の本」と言われる *The Great Gatsby* であるが、その中での女性キャラクターの担う役割は重要である。

引用文献

Allen, Frederick lewis. *Only Yesterday: An Informal History of the 1920's*. Perennial, 2000.

Fetterley, Judith. "*The Great Gatsby*: Fitzgerald's *droit de seigneur*" *The Resisting Reader:* A Feminist Approach to American Fiction. Bloomington: Indiana University press, 1978.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner, 2003.

フィッツジェラルド、スコット　『グレート・ギャツビー』村上春樹訳、中央公論社、2006

年。
---. *A Life in Letters.* Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner, 1994
---. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald.* Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner, 1989.
Giltrow, Janet, and David Stouck. "Pastoral Mode and Language in *The Great Gatsby.*" *F. Scott Fitzgerald in the Twenty-first Century.* Ed. Jackson R. Bryer, Ruth Prigozy and Milton R. Stern. Tuscaloosn: The University of Alabama Press, 2003.
Kerr, Frances. 'Feeling "Half Feminine": Modernism and the Politics of Emotion in *The Great Gatsby'. American Literature* 66 (1996): 405-31.
君塚淳一監修　英米文化学会編、『アメリカ 1920 年代―ローリング・トウェンティーズの光と影』金星堂、2004 年。
Lehan, Richard. *The Great Gatsby: The Limits of Wonder.* New York: Twayne Publishers, 1995.
野間正二「『グレート・ギャツビー』の読み方」創元社、2008 年。
---、「ニックはどうしてそんなに早く故郷に戻ったのか？－『偉大なギャツビー』再読－」、『アメリカ文学研究』第 42 号（2006 年 2 月）35－50、日本アメリカ文学会、2006 年。
Sanderson, Rena. "Women in Fitzgerald's fiction" *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald.* Ed. Ruth Prigozy. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
---. "Daisy, Jordan, and Myrtle" *Class Conflict in F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby.* Ed. Claudia Johnson. Gale and Greenhaven Press. 2008.
Sagert, Kelly Boyer. *Flappers*: A Guide to an American Subculture: Greenwood Press, 2010.
杉野健太郎編『アメリカ文化入門』三修社、2010 年。
Suwabe, Koich. "'It's a man's book": Fitzgerald's double vision and Nick Carraway's narrative/Gender Performance in *The Great Gatsby'. Studies in English literaure* English Number 46 (2005): 157-173, Tokyo Gakugei University, 2005.
Tate, Mary Jo. *F. Scott Fitzgerald A to Z: The Essential Reference to His Life and Work.* New York: Facts On File, Inc. 1998.
Ruth, David E. "Bad Men and Dangerous Women." *Inventing the Public Enemy.* Chicago: The University of Chicago Press, 1996.
山口菜穂子「トランスアトランティック『ヴァンプ』－アメリカ映画黎明期における性の地政学－」、『F-GENS Journal』 第 5 号（2006 年 5 月）393-399、お茶の水女子大学、2006 年。

2011年度修了者修士論文要旨

【地域文化専攻】

伊藤　幸穂　　木曽の彫刻家　千村士乃武

【言語文化専攻】

EGODYSH　SERGEY　ALEXANDROVICH　　島崎藤村『破戒』 作品構造の分析

加藤　夏希　　『諏訪大明神絵詞』の研究
―諸本比較から見る受容と展開

小岩井　美波　　アルフォンス・アレー研究

佐伯直子　　ラヴィ・シャンカル音楽論
「現象」となった1956～1968年に焦点を当て

S. M. ディヌーシャ　ティランガニー　ランブクピティヤ　　スリランカ人日本語学習者に見られる
感謝場面理解の特徴

山田詩織　　アプレイウス『黄金のろば』11巻を巡る論争

木曽の彫刻家　千村士乃武

伊藤　幸穂

本論文は木曽の埋もれた彫刻家だった千村士乃武（1910－1957）の人と作品をもう一度知らせることを目的に作成した。木曽に生まれた士乃武は東京美術学校に学び、1932 年に官展に初入選後、20 代前半から新進彫刻家として活動し始め、飛躍を嘱望された。1933 年から約 10 年間木曽福島の中心部にあった軍人胸像は士乃武が制作した作品だった。しかし今では存在を知る人はほとんどいない。筆者が初めて士乃武の作品を見たのは上松町の上松中学校である。士乃武は新制中学の教師を後年勤めたからだ。その後筆者が勤務する美術館で「没後 50 年千村士乃武展」が 2005 年に開催された。1968 年の初個展（遺作展）から既に 37 年が経過し、先行研究もほとんどなく、調査は困難ではあったが、展覧会は多くの観衆を得て住民の関心も高まり、美術関係者からも注目を集めた。しかし過去において誤解や風説の多い士乃武は、志半ばでこの世を去ったこともあり、その芸術性や人となりには不明な点も多かった。そこで本論では士乃武の人生を年代順に振り返りながら整理し、創作とその背景にあった社会経済環境の考察を心がけた。

本論の構成は、士乃武の人生をⅣ期に区切った各活動期と没後およびまとめの五章である。活動期間（Ⅰ期：20 年、Ⅱ期：10 年、Ⅲ期：9 年、Ⅳ期：5 年）は均等ではないが士乃武は約 46 年間の生涯のうち 4 度活動拠点を移動したので区切りに採用した。第Ⅰ章は士乃武の生年から旧制中学卒業までを考察した。第Ⅱ章は上京し東京美術学校に入学してから帰郷するまでの 10 年間を考察した。第Ⅲ章では木曽福島に拠点を置き制作活動を行っていた約 9 年間をまとめた。第Ⅳ章では木曽郡上松町に転居し新制中学校の教員となってから亡くなるまでの約 5 年間を考察した。最後に士乃武の芸術をまとめ、没後の顕彰活動と作品の保管等にも言及し、結論を述べた。

以上の結果、士乃武が戦前の東京で 10 年研鑽を積み、戦時中に帰郷後も常に高い志を持って彫刻家として生きたことが分かった。2 度の応召と結核を乗り越え、終戦後の好調だった地域経済を背景に木曽で制作した先駆的な木彫道標や数々の木彫小作品と、夫人をモデルに制作した日展出品 3 部作は、士乃武の人生で最も充実した創作活動の成果である。1949 年以後は東京藝術大学教授だった石井鶴三に師事し、亡くなるまで約 8 年間度々石井の木曽での制作を陰で支えた。中学教員だった 1952 年に法隆寺金堂復元工事で石井率いる彫刻家チームの一員に選ばれ 4 か月間滞在したことは、彫刻家士乃武に対する石井の最高の評価ではなかろうか。法隆寺では理想の美を求めて奮闘し多くの仕事を残したが、士乃武には戦前から軽度のアルコール依存傾向があり、周囲を困惑させた。更なる飛躍を期待されたが、創作に悩むことも多くなり、飲酒依存の傾向が強まった。最期まで夫人と家族に支えられ数多くの創造性豊かな作品を創作した士乃武だったが、1957 年に突然自ら命を絶った。原因は明らかではないが、士乃武は時代の流れや環境の変化、周囲への対応に全く無頓着な純粋な芸術家だったことも間接的要素だろう。家族への愛情は人一倍深かった士乃武の作品には高い品格と溢れる愛情が宿り、道具等の研究や石膏技術においては日本でもトップクラスの実力を持っていた。木曽教育会等の地域文化事業にも協力し地域文化へも寄与した。本論により断片的だった士乃武の創作の軌跡と残した業績が一つにつながったので、当該研究分野において新たな知見を提供でき、日本近代彫刻史での位置づけも試みることできるだろう。本論では士乃武は最晩年までレベルの高い創作を続けた稀有な木曽の彫刻家だと結論する。

島崎藤村『破戒』　作品構造の分析

EGODYSH　SERGEY　ALEXANDROVICH

「島崎藤村『破戒』　作品構造の分析」という論文内容の要旨は以下の通りである。
大きく分けて本論分は、序論（背景説明と研究方法）、本論（先行研究の調査と小説『破戒』の構成）と、結びからなっている。

序論にはどういうきっかけでこのような研究を始めたのかということと、具体的な研究の基礎とアプローチ等の説明をおこなった。論者はこの論文において、ソビエト文芸学の理論を踏まえながら、島崎藤村の小説『破戒』（明治 39 年、1906 年）の語り手と物語世界の関係を詳細に分析し、あわせてプロットの構成を検討することによって、この作品全体の構成を解明することを試みた。引用のテキストには、岩波文庫『破戒』を用いた。研究の目的は『破戒』の叙述がいかに作られているかを検討することである。論者が島崎藤村の小説『破戒』の叙述の分析を行なうにあたって依拠するところのテキスト分析の方法は、１．ミハイル・バフチン（1895-1975）の小説言語論とテキスト理論であり、そして ２．ヴィクトル・ヴィノグラードフ（1895-1969）に代表されるソビエト文芸学の〈作者の形象〉理論である。

バフチンのテキスト理論では、①作品全体を統括する原理としての作者と、②作品のうちに形象化されて存在する語り手と、③主人公、作中人物とが、明確に区別されている。

ヴィノグラードフに代表される〈作者の形象〉理論は、以下のようにまとめることができる。小説には基本的に、次元の異なる二種類の文学的時空間がみとめられる。その一つは、主人公や他の登場人物が生きて行動するところの〈物語の時空〉である。いま一つの文学的時空間は、作品の中で作者と読者が共有する場、自国の言語、風俗、文化等について両者が親しく語り合う場としての〈小説の語りの場〉である

本論では、先行研究と小説『破戒』の構成について述べた。
今日まで小説『破戒』とロシア文学の関係、小説『破戒』の分析に関してどのような研究が行われているかということを明らかにするため先行研究の調査をして、簡単な評価を行った。小説『破戒』の構成は、梗概、小説『破戒』の構成、小説『破戒』の叙述の分析という部分からなっていて、梗概には小説『破戒』のプロットの内容を要約して、小説『破戒』の構成という箇所で作品全体の構造についての報告をした。小説『破戒』の叙述の分析という箇所では、『破戒』の叙述がいかに作られているかについて、具体的な例を踏まえながらテキスト分析の作業を行った。読者が物語のもつ立体的な世界に没頭し、登場人物たちの様々な声を聞き、自らできごとを体験することができるようにするために、島崎藤村がどのような手法を使ったのかを明らかにした。

むすびは、全体のまとめと結論である。

『諏訪大明神絵詞』の研究―諸本比較から見る受容と展開

加藤　夏希

『諏訪大明神絵詞』(以下、『絵詞』とする)は、延文元年(一三五六)成立の諏訪社の縁起絵巻である。全十二巻であり、諏訪神の縁起譚を記した縁起部と、諏訪社の年中神事を記した祭祀部の二部構成となる。原本は既に失われているが、諸本は計十六点が存在する。

『絵詞』は、伝本間の本文が非常に接近しており、忠実に書写することが重視されていた本であったと思われる。本論は、『絵詞』諸本の詳細な諸本比較から、『絵詞』が、どのように受容され、展開していったかを明らかにすることを目的とする。

『絵詞』諸本は、計十六点の存在が確認されている。その内、神長本・武居祝本の二点は、失われた伝本となるが、金剌高野本(安政六年(一八五九)写)の注記からその復元が可能となる。『絵詞』諸本は、**権祝本**(文明四年(一四七二)写)をはじめとするⅠ類と、**梵舜本**(慶長六年(一六〇一)写)をはじめとするⅡ類の二系統に大きく分類出来る。Ⅱ類に属する伝本は梵舜本一点のみとなるのに対し、Ⅰ類は計十五点の伝本が属する。Ⅰ類は、権祝本をはじめとするＡ群、**大祝本**(江戸時代前期写)をはじめとするＢ群、**権祝矢島本**(江戸時代後期写)のみが属するＣ群、**神長本**(安政六年(一八五九)以前写)のみが属するＤ群の四系統に分かれる。それぞれの伝本系統の内、最も書写年代の古い伝本を扱って本文比較を行い、それぞれの特徴を明らかにした。

本論の序章では、『絵詞』の研究状況を整理し、本論の意義と課題を示した。

第一章では、Ⅰ類の権祝本とⅡ類の梵舜本の比較考察を行った。この考察から、『絵詞』諸本を大きく分ける二系統の異同内容を明らかにした。権祝本は、記述の統一性、描き方の差異、目移りの書き落としによる場面変化などの多く特徴を持つのに対し、梵舜本は、典拠『旧事紀』の一致、片仮名表記「ナド」の多用という特徴を持つ。この考察から、『絵詞』諸本を大きく分けるⅠ類とⅡ類の異同内容が明らかになった。

第二章では、前章で明らかにした権祝本の特徴を踏まえ、Ⅰ類Ａ群の権祝本、Ｂ群の大祝本、Ｃ群の権祝矢島本の比較を行った。大祝本と権祝本の本文は、非常に接近しているのに対し、権祝矢島本は大きく異なる本文を持つ。権祝矢島本は、諏訪社の霊験を強調した改変箇所を持ち、異なる伝本系統の本文が併せられた本文を持つ。権祝本と大祝本の本文の接近は、『絵詞』の忠実な書写意識を示す例となるが、権祝矢島本の本文は、やや異なる書写意識を見せる。

第三章では、失われた伝本となる神長本(Ⅰ類Ｄ群)と武居祝本(Ⅰ類Ａ群)の復元を行い、その異同内容を考察した。武居祝本に大きな異同は見られないのに対し、神長本は、神長官に関わる神事記事や説明に関する大幅な改変が行われている。神長本は、神長官の役割を伝えていく役割を持った伝本となる。

『絵詞』伝本間には、大幅な異同が見られる伝本は少ないため、書写者が大きく手を加えることの出来ない聖典として受容され、伝えられたものと思われる。ただし、伝本間の細かい異同を見ていくと、それぞれの伝本の特徴が明らかとなる。『絵詞』の諸本比較は、「変化しない縁起」という『絵詞』の役割と受容のあり方を見せるものとなった。一方で、細かい本文異同を捉えていく中で、伝本の展開とその繋がりを見ることが出来た。

アルフォンス・アレー研究

小岩井　美波

アルフォンス・アレー(1854-1905)は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、フランスで活躍したユーモア作家である。サペックと並んで二大ユモリストとして称賛され、短篇の他に、詩作・劇作・発明なども手がけた、非常に多才な人物であった。現在のフランスにおいては､没後 100 年にあたる 2005 年をきっかけに注目を浴び､アカデミックな視点から、アレーの持つ文学的価値の再評価が進行中である。一方日本においては、未だに本格的な先行研究が存在していないのが現状である。本研究では、アレー文学の特質の一端を明らかにするべく、アレーが『生前出版』と称して精力を注いだ選集シリーズの第一作目であり、また、アレーが作家としての地位を得て、彼の黄金時代を開くきっかけともなった選集《À se tordre》(『お腹がよじれる程に』) を対象として、分析・考察を行った。

《À se tordre》から見たアレー文学の特質の一端とは、「雑多性」である。アレー文学の雑多性は、アレーが読者に提示している、カーニバルやサーカスに似た世界から表出されるものである。そのような世界を形作っているものは何であるかというと、言葉遊びや外国語、造語、パロディ等といった、１）多彩な言葉や表現の多用、読者を欺いたり、真実の足跡をくらますことで、読者をアレーの世界に引き込む２）mystification、そして、母体が文芸キャバレー「シャ・ノワール」であることに起因している３）oralité（話し言葉性）の反映という 3 つの要素に他ならない。

それらの 3 つの要素の中で、最も特徴的なものは、３）の oralité の反映である。《À se tordre》に収録されている諸作品に見受けられる oralité の反映はさらに、3 つの要素に大別することが出来る。まず 1 つ目は、常連性の高い読者に対して、「如何にして意表をつくか・如何にして笑いに対する期待を満足させるか」というアレーの創作意図をクリアーするために生じている、作品の成立と受容の条件である。アレーはその条件を満たすために、ある程度一定された物語の素材や構成を反復して用いることで作品数を増やし、単調な物語が連続しないようそれらを様々に組み替えることで、物語の印象を強くするという工夫を行っていた。2 つ目の要素は、口頭での演技や会話をそのままの形で作品に取り入れた、②monologue（独白）と dialogue という物語の構造である。そして 3 つ目の要素は、常に目の前の読者を強く意識し、自在に物語に介入すると同時に、読者と自由にコミュニケーションを取るという、語り手の存在である。

アレーは、彼の作品の中で、現実世界のあらゆるものを笑いの標的とし、彼が作品の中に押し込んだ様々な要素を用いて、あの手この手で読者を笑わせようと試みている。そして、そのようなアレーの振る舞いが時に既存の概念に対する辛辣な皮肉となって表出した時、我々は彼の内に、1920 年代に起こるシュールレアリスムの兆しを感じるのである。

ラヴィ・シャンカル音楽論
「現象」となった 1956~1968 年に焦点を当て

佐伯直子

インド古典音楽が他の文化圏の音楽に与えた影響という問題に着手すると、そこには必ず、シタール奏者のラヴィ・シャンカル Ravi SHANKAR の名前が出てくる。ラヴィこそ、世界のあらゆる音楽ジャンルの、トップ・プレーヤー達と交流を持ち、インド古典音楽を広めるのみならず、彼らの音楽に強烈にインド音楽からの影響を与えた人物である。特に、50 年代後半から 60 年代にかけては、ラヴィに教示を受けたそうした音楽家が、次々と時代を代表する傑作を発表したことで、その影響は加速度的に拡大していく。筆者はこれを「ラヴィ現象」と名付ける。この現象は、西洋社会において多くの人々が既存の価値観に対して疑問を感じ、すでに、インド文化に注目しはじめていたという社会的背景の中で起こったわけであるが、本考は、西洋でインド音楽への関心が高まった時、なぜ、インドの音楽家の中でもラヴィのみがその要求に応ええたのかを、ラヴィの音楽家としての形成と親交のあった音楽家への具体的な影響から考察するものである。

まず、いかに時代的需要があったとしても、ラヴィの登場なくしては、インド古典音楽が強い影響力を行使するには至らなかったであろうということを確認するために作曲家オリヴィエ・メシアンを例に挙げた。彼は、古代の理論書だけからインド音楽のリズムを学び、楽曲中に採用したが、それは単に変拍子的な効果のためであり、インド音楽な特質にまで関心が及ぶことはなかったことを確認した。

本論においては、ラヴィと親しく交わり、「ラヴィ現象」の発端となった４人の音楽家、西洋クラシックのユーディー・メニューイン、モダンジャズのジョン・コルトレーン、ロックギタリストのジョージ・ハリスン、そして前衛音楽家フィリップ・グラスを取り上げ、交流の過程、思想的側面、音楽的側面からその影響を考察した。特に、ミニマル・ミュージックの代表的人物であるフィリップ・グラスに着目した。それは、先行研究が少ないこともあるが、グラスのみならず、ラ・モンテ・ヤングを含む、このジャンルの他の代表的な音楽家ほぼ全員が、インド音楽に強い関心を抱いていたためだ。西洋クラシックの最前線にあったミニマル・ミュージックとインド音楽との出会い、この２つの大きな流れの交差に着目することにより、「ラヴィ現象」を、音楽史的な視点からも考察できると考えたからである。

結論として、「ラヴィ現象」が可能だった要因は、フィリップ・グラスも認めるように、(1)西洋クラシックでは、それまでの機能和声とは別の新たな文法を模索していた状況があり、独自の理論とサウンドを備えたインド音楽が注目されていたこと、ラヴィが、(2)西洋音楽にも通じ、理論家だったからこそ、西洋音楽家に理論と実践を教示できたこと、(3) 超絶技巧をもつ演奏者であると同時に、インド音楽家では稀な作曲者でもあったこと、(4)ヒンドゥー教徒として、インド思想や音楽の哲学をも語りえたこと、そして(5)ジョージが「ワールドミュージックのゴッドファーザー」と呼んだ、ラヴィの人間的魅力、カリスマ性、というような諸点に集約できることを示したかった。メニューイン、コルトレーン、ジョージ・ハリスンに関しても共通である。

上記、５つの要因のどれか１つでも欠いたならば「ラヴィ現象」は起きなかったであろう。つまり、「ラヴィ現象」とは、ラヴィ自身の人間形成、音楽修行、交友関係などにおいて、様々な縁や偶然が重なった「奇蹟的な」現象であることも、併せて指摘した。

スリランカ人日本語学習者に見られる感謝場面理解の特徴

S. M. ディヌーシャ　ティランガニー　ランブクピティヤ

本研究は、スリランカ人日本語学習者の感謝に値する場面についての理解とその特徴を把握して、新たな感謝表現の指導法を提案することが目的である。そのため、一次調査では、スリランカ人 5 名と日本人 5 名を対象に感謝場面に関わる経験を語ってもらうインタビューを行った。調査の結果、日本人被調査者（JNSG）とスリランカ人被調査者（SNSG）が感謝場面を認識する際、場面に含まれる様々な要素に注意を払って、場面を理解していることが分かった。代表的な要素には、「感謝の受け手の負担」、「感謝の受け手と送り手の人間関係」、「感謝の受け手の気持」、「感謝の送り手が得た利益」、「感謝を表す場」、「感謝行為の当然性」がある。JNSG はこれらの「受け手の負担」、「人間関係」、「受け手の気持」、「送り手が得た利益」に注意を払い、感謝場面を理解して感謝を表出しているのに対して、SNSG は「親しい人間関係」、「私的な場」、「当然性が高い」ことに注意を払った場合感謝を表出しない傾向が見られた。さらに、JNSG は、感謝表出の有無によって、当該行為の価値を判断しているのに対して、SNSG は感謝表現の有無と関係なく、自己判断で評価をしている様子が窺えた。また、日本人は感謝の表出によって喜びや満足を感じており、反対に感謝の表出がないと悲しくなったり落ち込んだりする傾向も見られた。スリランカ人は感謝の表出とは無関係に喜びや満足を感じる傾向だった。つまり、日本人は常に感謝の表出を求めているが、スリランカ人はそこにそれほど注目していないと言える。ただし、感謝の送り手が得た利益を自身で確認できない場合は、感謝表現を求める傾向がある。

二次調査では、一次調査で挙がった要素の検討やスリランカ人日本語学習者の感謝場面についての理解とその特徴を把握する目的だった。そのため、スリランカ人日本語学習者、日本人母語話者、スリランカ人母語話者の三つの対象グループを設けた。調査方法では、一次調査で明らかになった感謝場面に含まれる「人間関係の親疎」、「人間関係の上位・同位」、「場の公私」、「当然性の高低」という要素を元に 8 つの場面を設定し、被調査者にロールプレイ（RP）をしてもらった。そして、RP の言語データを刺激回想法に用いてフォローアップインタビューを行い、被調査者の感謝場面における理解について調べた。調査の結果、日本人は上記の要素を認識することで感謝場面を理解し、感謝を多く表出するのに対して、スリランカ人は注意を払う要素によっては、感謝場面と認識していても、感謝を表出しない傾向があることが明らかになった。スリランカ人は「親しい人間関係」、「当然性が高い」、「私的な場」に注意を払った場合、感謝を表出しないが、「人間関係の上位」、「公的な場」、「当然性が低い」に注意を払った場合、感謝を表出する傾向である。スリランカ人日本語学習者の感謝場面についての理解では、日本人とスリランカ人両母語話者に近い特徴も見られるが、多くの学習者は、場面に含まれる要素とは無関係に「日本人が丁寧だから」という理由で感謝を表出している。これは、両国の感謝場面に含まれる要素やその背景にある文化について学習者が十分に理解していないことの表れと言える。

今回の研究では、被調査者の人数が少なく、研究結果を一般化できなかった。また、使用される感謝表現そのものについても調べられなかったため、スリランカ人日本語学習者に対する新たな指導法も明確には示せなかった。今後、被調査者の人数を増やすことで研究結果を再検討し、学習者における感謝表現の使用とその特徴を把握して、感謝表現の新たな指導法の提案を目指す。

アプレイウス『黄金のろば』11 巻を巡る論争

山田詩織

本論では、2 世紀のローマの作家であるアプレイウスの作品『黄金のろば』(原題: *Metamorposes*, 別名: *Asinus aureus*)の作品分析を行う。『黄金のろば』は完全な形で現存する数少ない古典ラテン語小説であるという点で現代においても非常に高い資料的価値を持っている。『黄金のろば』はしばしば奇譚を集めた諷刺小説として理解されるが、物語の構成やそこに介在する作者の意図に関して今なお多くの学者によって異なる解釈が試みられている。『黄金のろば』は 11 巻から成る散文小説だが、その内容は 1〜10 巻までと 11 巻とに区分する事が出来る。第 10 巻までは主人公である青年ルキウスが魔術によってろばの姿に変えられ, 長く苦しい旅を経る様が描かれ、第 11 巻では女神イシスの力によってルキウスが再び人間の姿を取り戻す様子が描かれている。数多くの悲喜劇的な寓話や挿入譚が散りばめられる第 10 巻までの内容に引き比べ、第 11 巻では突如としてまじめな信仰の描写になる事から、一見 1〜10 巻と 11 巻の間には大きな断絶があるように見える。多くの研究者がその点に着目しているが、第 11 巻の解釈の仕方は大きく 2 つに分けて考える事が出来る。一方は第 11 巻が物語全体に影響し、 構造を安定させる役割を果たしており, 物語を通して内的連関があると解釈する統一的な考え方である。他方で第 11 巻が物語を終わらせるための重りとしての機能を果たしているという捉え方も存在し、この時物語の構造が持つ内的な連関は想定されない。これはそれぞれの要素を個別のものとして考える分析的な捉え方である。本論では 1-10 巻と第 11 巻の関連性について詳細な作品分析を行う事によって、構造的な統一性とテーマ的な統一性を検証し, 内的連関を証明する。

第 1 章では作品中の登場人物が持つ宗教的な機能の類似性と連関を検証する。第 1 巻でルキウスがヒュパテーに向かう途中のテッサリアで出会った人物の話に登場する魔女メロエー、及び第 2 巻でルキウスがヒュパテーの町で招かれた小母ビュラエナの小宴にて見聞した話に登場するエジプト人予言者ザトクラースの宗教的な機能に付いてそれぞれ検証し、イシスとの関連を考察する。

第 2 章では「揺れる」という描写に着目し、第 2 巻でルキウスが出会う侍女フォーティス、その女主人であり魔術の使い手であるパンフィレエ、そして第 11 巻でルキウスを救済するイシスについて分析する。波がうねるイメージは三者に共通しており、さらにそのイメージは第 11 巻に向かうに従って俗世的なものからより宗教的なものへと変化している事を証明する。

第 3 章では curiositas(好奇心)という概念を中心に、鹿に変えられたアクタイオーン、及び隠された夫の姿を見ようとして罰を受けたプシュケーと、ルキウスとを比較する。これによって『黄金のろば』は特定の主題と用語が出来るだけ広範囲に渡って平行関係にある事が確立されるような方法で構成されている事を明らかにする。

第 4 章では、主に第 11 巻で行われる多数の女神の集約とルキウスが辿った行程を分析し、『黄金のろば』の物語全体が円環構造になっている事を明らかにする。

『黄金のろば』は複雑に入り組んでおり、それらの全ては第 11 巻へと至るために計算され、配置されている物語であり、一見娯楽的な内容を連ねているだけのように感じられるかもしれないが、しかし俗から聖へと移行するために綿密に形作られた連関構造と, 第 11 巻の記述の整合性からそこには確かなアプレイウスの知識と真面目さが潜んでいると結論付ける。

信州大学大学院人文科学研究科　院生会組織

院生会長（1 名）

院生会統括

（院生会の意見総括、院生総会開催、大学院委員会との連絡、各行事幹事、連絡事項管理）

会計（1 名）

院生会費管理

（会費徴収、物品購入、収支報告）

書記（1 名）

記録類作成及び管理

（院生会議事録、院生会活動記録）

シンポジウム委員（4 名）

シンポジウム運営

（シンポジウム連絡、原稿集作成・配布）

広報（1 名）

院生会活動報告

（写真撮影、院生会ホームページ運営）

院生会雑誌『人文科学研究』編集委員（1 名）

『人文科学研究』編集

（雑誌作成、投稿受付）

・任期はそれぞれ一年間とする。

・役員は基本的に M2 から選ばれるが、シンポジウム委員の半数は M1 から選ばれる。

・次年度役員の選出は各年度の 1 月中に院生総会を開き、そこで行う。ただし M1 からのシンポジウム委員については年度初めの院生総会において選出する。

・役員選出は立候補及び推薦による。

・各役職の兼務は各年度の院生会員の人数に応じて認める。

・休学や留学等の長期の不在やその他のやむを得ない事情の場合、各役員の交代を認める。

・役員構成及び各役員の業務内容は基本的にこの通りだが、各年度の状況に合せた変更は可能である。

平成 23 年度　信州大学大学院人文科学研究科　院生会活動記録

平成 23 年度院生会役員
院生会長　山田詩織
会計　小岩井美波
書記　高山華
シンポジウム委員(M2)　加藤夏希、佐伯直子
(M1)　梁瀬愛美、永田清顕
広報　佐伯直子
雑誌編集委員　加藤夏希

6 月 30 日　第一回院生総会　【 於　院生室 】
議題 1．院生会組織説明、及び今年度役員決め
議題 2．前年度会計報告
・院生会費の集金方法の連絡
・同年度予算案
議題 3．シンポジウムについて
・エントリー方法の変更
・エントリー締切日、及び原稿提出日の変更
・シンポジウムについての意見収集

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

9 月 29 日　信州大学人文科学研究科大学院前期シンポジウム　【於　人文ホール】
プログラム
▼09:30－10:15 エゴディシ・セルゲイ「島崎藤村『破戒』作品構造の分析」
▼10:20－11:05 加藤夏希「『諏訪大明神絵詞』の研究—失われた神長本の復元、及びその受容のあり方」
▼11:10－12:00　S.M.ディヌーシャ・ランブクピティヤ「スリランカ人日本語学習者に見られる感謝場面理解の特徴」
▽12:00－13:00 昼食・談話・M1 研究自己紹介
▼13:00－13:45 小岩井美波「アルフォンス・アレー研究」
▼13:50－14:35 山田詩織「アプレイウス『黄金のろば』における内的連関の研究—女性に用いられる身体描写を中心に—」
▽14:35－14:50 休憩・懇話
▼14:50－15:35 伊藤幸穂「木曽の彫刻家千村士乃武の遺作展座談会」
▼15:40－16:25 太田圭那「古代集落研究における基礎的単位性についての予察」
▽16：25－17:30 懇話・投票・開票・人文科学研究科長賞授与（加藤夏希）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2 月 7 日　第二回院生総会　【 於　院生室 】
議題 1．来年度役員選出
平成 24 年度院生会役員
院生会長　梁瀬愛美
会計　篠田早織
書記　任意
シンポジウム委員(M2)　永田清顕、高橋岬
広報　永田清顕
雑誌編集委員　梁瀬愛美
議題 2．　シンポジウム司会補助決定

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2 月 10 日　信州大学人文科学研究科大学院後期シンポジウム　【於　人文ホール】
プログラム
▼9：00－9：40 高橋岬 「ブラックバーンの見解による投影主義の優位性について」
▼9：45－10：25 小川祐輔 「二階の問い：「言語の意味とは何か」という問いはどのように解かれねばならないか ― マクダウェルの見解 ―」
▼10：30－11：10 李素婷 「16 世紀末から 17 世紀初頭における朝鮮半島から

みた琉球王国―『朝鮮王朝実録』を中心に ―」
▼11：15－11：55 永田清顕 「『善光寺縁起』の研究― 諸本間における国家観、国王（天皇）像の違いについて ―」
▼12：00－12：40 片所由生 「外国人留学生のパソコンメール文に対し日本語母語話者が抱く印象とその要因」
▽12：40－13：40 昼食・懇話
▼13：40－14：20 梁瀬愛美 「堀口大學による日本近代詩の海外紹介」
▼14：25－15：05 篠田早織 「Sylvia Plath の The Bell Jar における女性的主体」
▼15：10－15：50 上條智緩 「A Consideration on To-Infinitive」
▼15：55－16：35 赤羽佑太 「Be to Infinitive and Modality in Future Tense」
▼16：40－17：20 加藤夏希 「『諏訪大明神絵詞』の研究 ― 神長官家における『絵詞』受容のあり方 ―」
▽17：20－18：00 懇話・投票・開票・人文科学研究科長賞授与（梁瀬愛美）

『人文科学研究』投稿規定

原稿の種類

1. 修士論文要旨
2. 後期シンポジウムにおける発表原稿
3. 寄稿論文

投稿資格

信州大学人文科学研究科に在籍する者、もしくは過去に在籍したことのある者。ただし上記１と２については、当該年度に同研究科に修士論文を提出した者に限る。

原稿審査

それぞれ審査委員会にて行う。審査委員会には院生会員のほか、必要に応じて教員も加わる。

分量

それぞれ無制限

（提出形態の詳細については、編集委員会に問い合わせること）

提出先

信州大学人文科学研究科　院生会『人文科学研究』編集委員

連絡先：jb-in@shinshu-u.ac.jp

締切

毎年二月末

人文科学研究　第 9 号

平成 24 年 3 月 31 日　発行

編集者　　信州大学人文科学研究科院生会
発行者　　信州大学人文学部大学院委員会
〒390-8621　松本市旭 3 丁目 1 番 1 号信州大学人文科学研究科内